
『竜皇帝の花嫁』

しーぷ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『竜皇帝の花嫁』

【Nコード】

N1573W

【作者名】

しーぷ

【あらすじ】

中華風ファンタジー。完結済み。たまに分岐があります。好きな方を選んで進んでみてください。
竜と天女を祖に持つ竜天国。天領の姫、鈴花は皇帝の息子、竜蒼と婚約していたのだが……。

天女の庭

竜宮には一年中花が咲いている。

この地に眠る竜天国の始祖が妻と子孫を思つて咲かせているのか、あるいは眠る夫を見守る天女の力なのか　この場所から花が消えたことはない。

むせ返るような香りの中、鈴花は歩いていった。

今年で七歳になる天領の姫は、しやらしやらと簪を揺らして辺りを見回す。

探しものだ。

蓮華草。ピンク色の丸い花が自分の名前の鈴を思わせるので好きなのだ。

どの花も季節を無視して咲いているので、なかなかどこにあるのかわからない。

春の花を囲むように夏の花が咲き、こっそりと秋の花が隠れている。

甘い香りの風に冬の花が揺れている。

どの花も美しいけれど鈴花は蓮華草でしか作れない。

くるくると歩き回って、やっと見つけた。

鈴花は蓮華畑に座り込んだ。ピンクの裳裾がふわりと膨らんで、花に混じる。

茎を長めにとって編み、花冠を作った。

ほかの花での作り方はまだ知らないのだ。

「竜蒼様に差し上げるのです」

満足してひとりごちる。

幼い鈴花には、生まれて初めて会った許婚にあげられるものはほかにない。

天領の姫としての力も目覚めていなかった。それを思うと、少し胸が痛んだ。

年ごろになれば目覚めるものだと、みんなが言う。

花を育て、ひとを癒す力。

いまその力があれば、救いを求めて竜宮に来るひとびとを助けてあげられる。

だれもが天領の姫と言って鈴花を慕ってくれるのに、鈴花は彼らになにもしてあげられないでいた。まだ幼いのだからと父母に言われても胸の痛みは消せない。

花冠を腕にかけ、鈴花は祈った。

「天女様、天女様。鈴花にお力をお与えください。姫として民を救いたいです。そうして竜蒼様のお力になりたいのです」

いまはむかし。遠い遠いむかし、竜天国の大地は悪しき竜に蹂躪されていた。

大地の乱れは天をも乱す。

天帝に命を受けて地に降った天女は、竜に尋ねた。

『どうして乱暴狼藉を働いているのです？』

竜は答えた。

『……ひとりは、寂しい』

竜には同族がいなかった。

天女は竜の妻になり、ふたりは竜天国を築いた。

竜の死後、天女は天に戻ったが、いまもこの国を見守っているという。

北部頭州は狸氏が治めているけれど、昇湖に浮かぶ、この竜宮だけは違った。

竜宮のある島は天領と呼ばれ、皇帝の権力さえ及ばない。

ここは天女のための場所だった。

彼女が天に戻った場所で、彼女の力を受け継いだ娘が移り住んだ場所でもある。

最初天領の姫、花元公主は類稀なる力を持ち、二代目の皇帝であつた弟を助け、大地に花を咲かせて民を飢えから守ったという。

以来天領の姫は不思議の力を受け継ぎ、花のついた名前を持つと決められていた。

皇家の分家である天領の姫は、何代かおきに当代に嫁ぐのが慣わしだった。

また、公主が天領に降嫁するのも珍しいことではない。

竜と天女の血を守るためだが、尊い血が濃すぎてゆがむこともないようと、従兄妹より近い間柄での婚姻は禁じられていた。

今上帝の長男、皇后が産んだ蒼皇太子と鈴花の血は遠い。

天領の家系は脈々と続いてきたけれど、皇家は政変によって何度も滅びかけた。

暗君だった先帝を反乱軍とともに打ち倒した今上帝は市井の生まれで、前に枝分かれして庶民に和した皇族の末裔だった。

祈り終えた鈴花は、蓮華を摘んだ辺りに手をかざした。

風が蓮華畑を揺らし、ピンクの波を起こす。

けどなにも起きない。

摘まれた蓮華は茎を晒したままで蘇りはしなかった。

鈴花は、ごくんと涙を飲み込んだ。

父母も家臣たちも、救いを求めてきたひとびとでさえ、鈴花が天領の姫の力を持たないことを責めない。彼らのことが好きだから、余計にその優しさが重かった。

ふっと腕にかけた蓮華の花冠を思い出す。

「いけない！ 早く差し上げるのですわ」

自分の家とはいえ竜宮は広い。蓮華草を探して、ずい分と迷った。竜宮の庭には花を楽しむための亭（東屋）がいくつも建てられている。

蒼皇子を待たせているのはどこだっただろうか。

池に浮かんだ水樹でなかったことくらいしか覚えていない。

鈴花よりも背の高い花々をくぐり抜けて進んでいくと、なにかが聞こえてきた。

「ほあっ！」

鈴花の背筋に悪寒が走った。

すすり泣きだ。鬼（幽霊）だろうか。

いやそんなはずがない。ここは天女の土地だ。冥界から鬼が現れるはずがない。

けれど湖の昇は、天女が天に昇った場所という意味だけでなく、冥界に落ちた竜の魂が昇ってくるという意味もあるという。

天領の姫の中には、見鬼の力を持っていたものもいるという話だ。

「えっ、えっ、えっ……」

鬼にしてはあどけない声。

いやいや、子どもだって死ねば鬼になるのだから安心は出来ない。

鈴花は花の陰から泣き声の主を覗いた。

そこは蒲公英の花畑。

黄色い花に混じって揺れている、同じ色の頭。肌は褐色。正装である上衣下裳があまり似合っていない。

竜蒼と一緒に竜宮に來た皇帝の息子のひとりだ。

「……竜玄様？」

少年は、びくりと顔を起こした。

まだ五歳のはずだけれど、西域から帰順した虎家の血を引く彼には異民族の特徴が色濃く出ていて、ふたつ上の鈴花よりも大柄だった。涙に濡れた瞳が青い。

端整だが荒削りな容貌で、将来野性的な美丈夫に育つだろうと予感させていた。

「俺……俺、ごめんなさい……」

涙を拭う腕には刃で斬られた痕がある。

鈴花は顔をしかめた。

褐色の腕に血がこびりついている。あまりに痛そうでもらい泣きしてしまいそうだ。

「竜玄様、どうなさったの？」

「碧兄上……碧皇子様が、黒い肌でも血の色は同じなのか見るって

言って……」

第二皇子竜碧の立場は微妙なものだった。

今上帝が市井にいたところからの恋人である鶯夫人を母に持つものの彼女はもういない。

庶民だった鶯夫人に後ろ盾はなく、彼自身の素行もあつて支持するものは少ない。

年齢的にも第一皇子竜蒼より下だし、異母兄の母は名門獅家の娘で正式な皇后であるとなれば、万にひとつの勝ち目もないといわれていた。

帝位を主張する彼の一派が持つ根拠は、本当なら今上帝は即位したときに鶯夫人を皇后にしていたはず、というものだ。離縁させられるのを怖れた獅皇后に毒殺されたのだと訴えているのだが信憑性はない。

鶯夫人は今上帝の即位前ではなく、即位後に亡くなっているからだ。ただ獅家は毒の扱いに長ける一族として有名なため、その噂を信じているものも少なからず存在する。

鈴花は帯から薬を取り出した。

天領の姫の力には目覚めてないけれど、咲き乱れる百花から作られた薬の用法は教えられている。

「竜玄様、お手手を貸してくださいませ」

「……うん……」

一時期今上帝の寵愛を独占していた虎夫人もすでに亡くなっている。

こちらのほうは獅皇后の仕業に過ぎないと、だれもが思っていた。虎家は一族の血を引く竜玄を支持するとともに新しい虎夫人を後宮に送り込んでいる。

新しい虎夫人にとっての彼は、一族の宝で、なお且つ自分が身籠ったときは敵になるという二律相反の存在であった。

もっとも鈴花がそういった入り組んだ事情を知るようになるのは、まだ先のこと。

このときの鈴花にとっては、竜蒼はいつか結婚する許婚のひと、竜碧はなんとなく意地悪そうなひと、竜玄は体は大きいけれど年下だから守ってあげなくてはいけない子　そんなところだった。

ベタベタと傷薬を塗りたくり、鈴花は最後に髪を結っていた布をほどいて竜玄の腕に巻いた。淡雪のようにやわらかいうす紅の布に、少年は目を丸くした。

「ダ、ダメだよ。そんな綺麗なの」

彼は体の大きさだけでなく、精神的にも五歳を上回っているようだ。

味方と信じきれぬ相手がいない状況が、そうさせているのだろうか。

鈴花は首を傾げた。

「天領の姫は、ひとびとの傷を癒すためにいるのですわ」

頭の角度が変わったせいで、簪が抜ける。結っていた髪が解けたせいで、しつかり固定されなくなっていた。

「姫様！」

「え？」

気づいた竜玄は声を上げたが、まだ咄嗟に体が動くほどには成長していなかった。

しゃらん。

七歳と五歳。鈴花と竜玄には大きく見える手が、地面に触れる前に簪を受け止めた。

「竜蒼様！」

振り返り、鈴花は頬を膨らませた。

自分が迷っていたことを棚に上げて、怒りを主張する。

「すぐに戻りますから、お待ちになったださいと申し上げたでしょう？　竜宮は広いのですから、初めての竜蒼様は迷子になっ
てしまいますわ！」

竜蒼は柔和な顔に苦笑を浮べた。

絶世の美女と名高い獅皇后にうりふたつの彼は、凜々しい美男に

成長するだろうと噂されている。いまでも充分麗しい。幼い鈴花ですらひと目で好きになったほどだ。

息子とともに竜宮を訪れた獅皇后の美しさにも感動した鈴花は、……いつかは鈴花も皇后様のようになるのだわ。

と、根拠のかけらもない希望を抱いている。

実際には皇家に次いで交わることの多い狸家の血が色濃く出ていて、鈴花は綺麗というよりも可愛い顔の持ち主だった。幼いせいもあるが、どこことなく丸っこい。

「すぐですか。でも姫様？ もう花茶は冷めてしまいましたよ？」出した花茶が冷める前に戻ると約束していたのである。

鈴花はうつむいて、ううと唸った。気恥ずかしい。

竜蒼は優しく鈴花の頭を撫でたあと、簪を戻してくれた。

「意地悪を言つてごめんなさい。お会いしたくて約束を破ったのは私のほうですね」

鈴花は首を横に振った。

竜蒼を好きになったのは、麗しいだけでなく優しいからだ。

亭で話をしていたときも熱いお茶を冷ましてくれたし、お菓子もわけてくれた。

翔都の芳土宮に戻ったら、今日の記念に装身具を届けさせるとも言ってくれた。

だからなにか贈りたくなったのだ。

「竜蒼様、ごめんなさい。鈴花は遅くなりました。これを差し上げたかったのです」

腕に通して持ち歩いていた花冠を差し出すと、竜蒼は微笑んで受け取ってくれた。

子どもが作った出来の悪いクシャクシャの花冠を頭に載せる。

「ありがとうございます、姫様。……玄」

竜玄の青い瞳から、ぼろぼろと涙が流れ落ちた。

長兄の姿に安堵したのだろう。鈴花もホッとしてもらい泣きをこぼした。

「兄上……蒼兄上……」

竜蒼は形の良い眉をひそめた。

「また碧だね、可哀相に。直接注意すると、あとでお前が苛められるから、私がこっそり意地悪をしておいてあげる」

そう言つて、竜蒼はニヤリと悪い笑みを浮かべた。

「さあ、それじゃあ三人で亭に戻つてお菓子でも食べましょうか」

鈴花は竜蒼が差し出す手を握った。

それから気づいて、竜玄に手を差し出す。

彼はおどおどと怯えながら、けれどしっかりと握り返してきた。
「そうしましょう！」

鈴花が言つと、竜蒼が微笑んだ。

竜玄も笑う。

三人は花の道を歩き出した。

あれから、十二年。

鈴花は北部頭州から、翔都のある右州へと落河を下っていた。

船の縁から水面を見ると、一輪の花が海へと流されていく。

竜宮から流れてきたのだろうか。

いや、昇湖は落河とつながっていない。鈴花だつて頭州の港までは輿で進んだ。風が運ぶ時期でもない。季節外れなのは花の開花だけで、天領だつて空や風は外と変わらない。

振り返れば落河の源流があるという護山脈がそびえたっている。

もしかしたらそこから流れてきたのだろうか。

護山脈は遠い。頭州に属していることになつてはいるが、人里離れた北の彼方だ。

花は自分がどこに流されていくのかなど考えたこともなかったに違いない。

鈴花だつて想像もしていなかった。

自分が許婚の竜蒼のもとにはなく、彼の父親である今上帝、竜青の後宮に入ることになるなどとは。

船倉に置いてある荷物には、この十二年間に竜蒼にもらった竹簡も装身具も入れてはいない。彼が竜宮に来たのは、あのかの一度だけだったけれど、芳土宮に戻って約束の品を送ってくれたあとも、折につけ手紙や贈り物を届けてくれていた。

とはいえほかの男からの贈りものなど必要ないくらい、皇帝がすべての準備をしてくれていたし、鈴花も持っていく気にはなれなかった。

見ればかならず思い出してしまう。

幼い少女が精いっぱい、年上の許婚を想っていた気持ちを。

……竜蒼様。

流れる花は自分の行く末を知らない。

……わたしは、鈴花はどこに行ってしまうのでしょうか？

鈴花はいまだ天領の姫としての力に目覚めていない。

だからだれかが竜蒼には相応しくないと考えたのだろう。

そのだれかはきっと、天から見守ってくれている始祖なる天女に違いない。

踊るように水面で回っていた花は、いつか涙で滲んで見えなくなつた。

天女の庭（後書き）

< 『竜皇帝の庭』につづく >

竜皇帝の庭

竜天国右州落河に映るのは翔都、竜皇帝住まう芳土宮。

広大な芳土宮の一部でありながら後宮は、それ自体がひとつの町のようにだった。

下級后妃は集団住宅で生活し、皇帝に呼び出されるものだが、鈴花のような上級后妃には一軒家が与えられ、皇帝のほうから訪れる。今上帝竜青には獅晶波という皇后がいたため、鈴花は夫人の地位に置かれた。

皇后に次ぐ地位と権力を持つものの、同じ位のものがふたりいる。そもそも天領の姫が皇后以外の地位で後宮に入るのは、竜天国が建国されて以来始めてのことだった。

鈴花に与えられた家は、いつそ宮殿といっても良いほど豪華なものだった。

実際小さな州を治める君主の館よりも大きいに違いない。

室内は、彫刻され彩色された木工細工できらびやかに飾られている。部屋の隅に置かれた青磁の壺が彩りを引き締め、派手で軽薄になりがちな雰囲気调和していた。

窓から吹き込む風が、あちこちに飾られた花の香りで部屋を満たす。

それは鼻をくすぐるだけで、けして支配はしない。

確かめようとすれば消えてしまう、心地良い儚さを保っていた。

花に覆われた竜宮から来た鈴花を気遣ってくれたのだろう。

耳を澄ませば芳土宮の敷地を流れる人工河のせせらぎが聞こえた。

「天夫人」

厳密に言えば、鈴花に姓はない。

天領の姫は天女の化身。地上の人間の血には縛られない。

しかし慣例として、後宮に入る際には天の姓を名乗ることとなっていた。

鈴花を呼んだのは仮面をかぶった男だった。

彼の字は幽海、姓名は宦官になったとき捨てたのだという。

天夫人の護衛であり世話役でもある。仮面でくぐもった声は、どこか聞き覚えがあるような気がした。そもそもどうして仮面をかぶっているのだろうか。後宮にいるほかの宦官は素顔を晒していた。

「なんですか？」

「獅皇后陛下からお誘いです。羽律苑にお越しく下さいとのことです」

鈴花は目を丸くした。

「どうなさいます？ 輿をご用意いたしましょうか？」

本なら母と呼んでいたはずのひとが、いまは同じ男性の寵愛を争う相手になった。

複雑な思いを飲み込んで、鈴花は幽海にうなずいた。

輿で運ばれ、羽律苑に着く。

後宮内にある広大な庭園は、百二十人を前後する上級下級の后妃たちの無聊を慰めるため、さまざまな施設を内包している。動物園、植物園、音楽や演劇を楽しむ舞台、いささか品はないが競馬や闘鶏なども楽しめた。

芳土宮を流れる人工河から水を引いた池もあり、船遊びも可能だ。季節の式典の折などには一般に開放することもあるという。

后妃たちに仕える召使たちも散策を楽しめる場所のはずなのに、辺りには護衛の宦官以外の姿はなかった。

鈴花は空を見上げる。

やわらかな春の空。風が優しく髪を撫でていく。

羽律苑の木々も競うように花をつけている。

後宮の仕事は基本午前中だけだ。いまは午後。せつかくの天気なのだから、花を見たいと思うものはいなかったのだろうか。

いや、いたに違いない。

だれもいないのは、彼女がそう望んだからだ。

獅皇后は先に待っていた。

頭の左右で翼のように広がった鬘は彼女が考案したもので、後宮の後妃たちの間で流行していた。派手な簪や髪飾りではなく、白い小さな花を髪に散らしている。

裳は短いものが幾重にも重ねられていて、裾にふわふわした羽が縫いつけられていた。

手にした扇にも羽が飾られている。

背後に広がる春を盛りの羽律苑の景色と相まって、彼女は天女のように見えた。

もしかしたら、庭園に合わせて詠えた衣装なのかもしれない。

「竜宮には及びませんが、羽律苑の花もなかなかのものでしょうか？」

獅皇后に尋ねられ、鈴花はうなずく。

故郷の花は狂い咲きだった。美しいが風情に欠ける。

季節を待つて咲き、やがて舞い散る儚い花のほうが美しい。

そんな風に思うのは、眼前に立つ獅皇后の姿を重ねているからかもしれない。

二十代半ばの息子を持ちながら、彼女は柳のようにしなやかだ。

絶世の美女という呼び名は獅家の圧力によるものではない。

獅皇后の左右には双子の侍女　やはり美しい。年ごろは竜蒼よりやや上くらいだろうか　が控えている。三人の姿は一幅の絵の

ように、鈴花は見惚れてしまった。

三人の後ろにいる背の高い侍女も美しい。

吸い寄せられるように視線を送ると、後ろの侍女は控えめに俯いた。

「天夫人」

慣れない呼び名に、戸惑いながらも獅皇后を見る。

「はい、なんでしょう」

「夫人は、男性でいうところの『公』の立場にあります。皇帝陛下のお子を身籠る以外にも、この後宮の婦礼きまりを考えるという大切なお役目があることを忘れず、下級后妃たちの手本となるようお励みく

ださい」

「はい……」

「また、毎日尚宮府において会合を行ないます。わたくしが朝議に出席した後になりますので時間はまちまちですが、迎えをやりますので必ずご出席くださいませ」

今上帝は政治に興味がない。

根っからの武人なのだ。竜天国に住むさまざまな部族が風習や考え方の違いによって、あるいは利益を求めて起こす小競り合いを収めるのに忙しいという言い訳で、芳土宮の表には滅多に寄り付かない。もっとも即位するなり美女狩りを命じたほどの好きものだから芳土宮の裏に当たる後宮には足繁く通っている。大きな声ではないが、役立たずな皇帝の退位と優秀な皇太子竜蒼の即位を望むものは多い。

皇帝代理として朝議に出席し、政治的な決断を下す獅皇后は、ある意味芳土宮の裏表を取り仕切る最高権力者であった。

「かしこまりました」

鈴花は首肯した。

いつかこの女性を憎み、追い落としたいと思う日が来るのだろうか。

わからない。

今上帝はいまも軍を率いて各地を転々としており、鈴花は代理の官吏と儀礼的な式をおこなっただけで、まだ彼の顔も見えていなかった。

十二年前に竜蒼と婚約したときも、父親の竜青は竜宮には来ていない。

代わりに獅皇后が息子たちを連れてきていたはずなのだが、あのときの女性と眼前の女性が同一人物とは思えなかった。鈴花が成長したからだろうか。いまの鈴花には、獅皇后があどけなさを残した少女のように見える。

それでいてじっと見つめていると、老仙人を前にしたらこうなの

かもしれないと思うほどの、深いなにかが伝わってくる。

「最初から難しいことはわからないでしょう。しばらくの間わたくしが教育係としてつきますので、なんでもお聞きください。後宮の掟は込み入っていてわかりにくいもの。一度で理解出来ないのは当たり前ですから、何度でも聞いてくださいね」

天領の姫だから敬ってくれているのか、あるいはもとからの性格か。

獅皇后の口調はやわらかく、どこまでも丁寧だった。

鈴花がうなずくと、彼女は微笑み、ぽん、と持っていた扇を閉じた。

「では、お近づきの印に迷蔵かくれんぼをいたしましょう」

「……は、はい……」

「探すのはわたくし。隠れるのは天夫人と泡玉に泡珠」

「「はい、皇后陛下」」

双子の侍女が声を揃える。

「それから……」

背の高い年かさの侍女を振り返り、獅皇后は笑みをこぼした。

「子波ね？」

侍女は無言でうなずいた。

「幽海たち宦官は、羽律苑に入るものがないよう監視をなさい。もちろん隠れるものたちが部屋に帰ろうとしても止めるのですよ？」

「御意」

獅皇后は手にした扇を広げて顔を覆う。

「さあ、始まり始まり。百数えたら探しにいきますよ？ 急いで急いで」

ふっと、鈴花は気づいた。

獅皇后の口調はやわらかく丁寧なだけではなかった。子どもに話しかけるときの親のものと同じ愛情がある。

故郷の母を思い出して唇を噛む。

……どうして。

どうして獅皇后を母と呼べないのだろう。

どうして十二年間想い続けた相手ではなく、その父親に嫁ぐことになったのだろう。

「……じゅーう、じゅーいち、じゅーに……」

潤んだ目を拭い、鈴花は林になった場所へと駆け出した。
しゃらん。

簪が鳴る。

鈴花は近くにあった木の幹に背中を預けた。

竜宮とは少し違うけれど、草木の匂いに心が休まる。

後宮には后妃たちの香の匂いが充満していた。嫌な匂いではないのだが、刺激的過ぎて疲れてしまう。

与えられた家の中は心地良かったけれど、輿に乗っているとはいえ、そこに帰り着くまでは苦しそうだ。

その強過ぎる香は皇帝を引き寄せるための后妃の努力だ。

天領の姫として苦勞を知らずに生きてきた自分が、高みを目指して戦ってきた后妃たちと競い合い生き残ることが可能なのだろうか。
わからない。

いつそ季節を過ぎた花のように、舞い散ったほうが潔くて美しいのかもしれない。

地面に積もった落葉を踏む音に顔を上げる。

背の高い侍女、子波だ。

こちらに近づいてくる侍女の顔を見ると、なにかが頭で蠢いた。

獅皇后、獅晶波、波、子波、子どもの波、波の子供？

皇后の子どもはひとりだけだ。

「……竜蒼様……？」

彼はイタズラな表情で片目を瞑って見せた。

骨ばった長い指を薄い唇に押し当てる。結構口が大きい。

「ダメですよ、姫様。後宮は皇帝以外の男子禁制なのですから」

確かに竜蒼の顔だ。

十二年ぶりでも見間違えるはずがない。

数日おきに届けられていた竹簡が運んできた香と、同じ香りもする。

それにしても、なんと美しいのだろう。

最初から背が高いとは思っていたものの、男だとはかけらも思わなかった。

獅皇后に似ているが、端正な顔は母親よりも凛としていて好ましい。

小声でも響く澄んだ声が、そつと鈴花の耳朵を打つ。

「数年前に忍び込んだ碧が処刑されたことは知っていますでしょう？ 皇帝の息子であるうとも、掟を破れば罰を受けます」

第二皇子の碧は、父親の後妃に横恋慕をして後宮に忍び込み、彼女を身籠らせたのだと聞いていた。彼は罰を受け、后妃のほうもいまは後宮にはいない。夫人だった彼女の抜けたあとに鈴花が入った形になる。

「……どうして……？」

竜蒼の瞳が、真っ直ぐに見つめてくる。

「父は病です。胃の腑に瘤が出来て血を吐いています。もう長くはないでしょう。だからこそ父は、天領の姫であるあなたを娶ることで真の皇帝になろうとしているのです」

今上帝は成り上がりものだ。竜の姓を持つものは少なくなかった。獅家の娘を妻にしていなければ、反乱軍が先帝を倒しても衛尉にすらなれなかっただろう。

いまま政治に無関心な態度を責められ、みなに退位を望まれている。

「本当はいますぐあなたを救い出したいけれど、さいわい……と言って良いのかどうかはわかりませんが」

竜蒼が苦笑を浮べる。

「父の病状は悪化するいつばうですし、南部尾州の争いが長引いて

いるから、しばらくは帰れないでしょう。時間がすべてを解決します」

鈴花は彼を見つめた。

今上帝の病死を待つ。それは正しい判断だ。もし反乱を起こせば、本人だけでなく一族郎党が罰を受ける。

鈴花の胸がざわめいた。

新しい皇帝は先帝の後宮から実母以外の后妃を受け継ぐ権利がある。

もちろん彼女たちを解放しても良いし、侍女や召使い、婢という形で残しても良い。

何代か前の皇帝が北の遊牧民の血を引いていたことから取り入れられた風習だ。

このまま今上帝に散らされることなく、ときが過ぎて、即位した竜蒼のもとへ行くことが出来たなら……鈴花は唇を噛んだ。

思い出したのだ。

数年前、碧皇子が処刑された後、密やかに広がった噂がある。后妃が身籠ったのは、本当は蒼皇太子の子どもだったに違いないと。

そうでなければ獅家が必死になって、后妃の命を救ったはずがない。彼女の子どもが竜蒼のものだったからこそ、後宮放逐で済ませたのではないか。

嘘だとは思っている。

母親の違う竜蒼と竜碧兄弟の仲が良かったとは思えないけれど、彼は異母弟に罪を着せて平気な人間ではない。

でも気づいてしまったのだ。

結局は同じことだ。

即位して後宮を作れば、竜蒼はだれかひとりのものではなくなる。国のため、跡取りを作るため、貴族たちとの関係を友好に保つため、皇帝はすべての后妃と平等に夜を共にするのだ。

「……姫様……」

漆黒の瞳が鈴花を見つめている。

「そのときが来たら、あなたを迎えに来てもいいですか？」

鈴花も竜蒼を見つめ返した。

嫌だと、竜宮に帰りたいと言っても、たぶん彼は聞いてくれる。

……わたし。わたしは……

竜皇帝の庭（後書き）

< 『竜花の約束』につづく >

竜花の約束

「……はい」

うなずいたのは反射的なものだった。

深い考えはない。流されたのだ。

竜天国は男尊女卑だ。比較的女性の地位が高い竜宮で天領の姫として崇められて育った鈴花でも、男性に逆らうことには慣れていない。

けれど。

「良かった」

力強い腕に抱き寄せられる。

女性の格好をしていても、その胸は広く逞しいことがわかった。

感触に戸惑う。筋骨隆々という風ではない。でもその体は確かに男性のもので、鈴花とはまるで違う。

なんだか体が火照ってくる。

弾んだ声が耳元で言った。

「本当は不安だったのです。数年前に妙な噂が流れたでしょう？もしかしてあなたが、あれを本気にしているのではないかと」

「そんな……」

声の上擦る。嘘だと思っではいるが、気にしていたのは事実だ。

竜蒼の腕に力が籠る。後ろで乾いた音がした。

「竜蒼様？」

「いけない」

彼は満面の笑顔を浮かべていた。

「後宮でこんなことをしていたら、男だと気づかれなくても、魔鏡（GL）だと思われて罰を受けてしまいますね」

「え、ええ。……あの、なにか落とされませんでしたか？」

「なにか？」

竜蒼は自分の服の袖を覗き込んだ。

彼の顔色が変わる。

鈴花も振り返り、さっきの音の主を探す。

真っ黒に乾燥した植物の輪が、林の下草の上に転がっていた。

「……覚えてらっしゃいますか？」

しゃがみ込み、竜蒼がそれを拾う。

「もしかして……？」

「はい。十二年前に頂いた花冠です。母の実家が薬品に詳しい一族なので、防腐処理を施したのですが、残念ながら色を保つのは無理でした」

心臓がざわめく。

どうしてこんなものを持ち歩いてくれているのだろう。

なんだか期待してしまう。だって価値のあるものではない。子どもが作って、優しい年上の許婚に押し付けたものに過ぎないのだ。

鈴花の視線に気づいた竜蒼の顔から笑みが消えた。

痛いほど熱い視線が鈴花を射る。

長い骨ばった指が髪に触れた。彼は安堵しているかのように息を吐き出した。

「夢じゃない。本当のあなたが目の前にいるのですね」

鈴花は首肯した。

そのまま顔を上げない。竜蒼の視線が怖かったのだ。

「十二年も会わないでいた許婚、しかもいまは夫の息子に過ぎない男に愛を打ち明けられても困るでしょう。でも、私はあなたを愛しています、天領の姫」

首を横に振る。

自分には彼に相応しいものなどなにもない。

生まれ持っているはずの不思議の力さえないのだ。

髪をなぞっていた指先が、頬へと伸びる。竜蒼の爪先は硬く冷たい。

指先が顎をつかみ、鈴花の顔を上げさせた。

彼の口元に意地悪な笑みが浮かんでいる。

「天領の姫としてのお力がないことを気にしてらっしゃるのですか？」

「……はい。わたしは、ひとびとの期待を裏切ってばかりです」
竜蒼が吹き出す。

「いまはもう、自分のことを名前で呼ばないのですね」
「当たり前です！」

不意に顔が近づいて、鈴花は息を飲んだ。
どうして服装に惑わされて、侍女だなどと思ったのだろう。彼は男性だ。

筋の通った高い鼻にいまにも触れそうで、無意識に体が後退する。
しかし逞しい腕がそれを許さなかった。

「私は嘘つきなんです。自分が相応しくないとわかっていても、上辺を取り繕って、みなを誤魔化して生きてきました」

「そんな……」

「だから、最初はあなたのことが嫌いだったのです。……自分を見ているようで。甘やかされて育った天領の姫、血筋の上に胡坐をかいて、なんの力もないのに愛され受け入れられている」

事実だ。

恥ずかしくて彼から視線を逸らしたくなる。

顎を支える指の感触は優しいのに、鈴花の力ではびくともしない。

……竜蒼様は違うのに。

せめて首を横に振りたい。彼にはちゃんと、皇太子としての実力がある。竜宮に閉じ籠もっていた身にも噂は届いてきた。

「けれど花冠をいただいたとき気づいたのです。力がないことに罪はない。おのれの領分をわきまえて努力することが大切なのだと。

姫様……鈴花。あなたがいなかったら、私はきっと自分を好きになれなかった」

唇が重なる。

薄いけれど情熱のぬくもりを帯びた唇だ。

しばらくして顔を離れた竜蒼は、照れくさそうな笑みを浮かべて

いた。

少年のようだ。

「こんなことをしていたら、本当に魔鏡だと思われてしまいますね」
「竜蒼様！」

鈴花は彼の腕をつかんだ。夢中で尋ねる。

「どうなさったのです？」

青年の漆黒の瞳には涙が滲んでいた。

「……本当はイヤです。あなたが父の后妃にいるのは。このままあなたを連れ去りたい。父の手が触れなくても、ここにいるだけで危険は多い。この国も皇太子としての立場もどうでも良いから、あなたをさらって行きたい」

「竜蒼様……」

後宮には多くの陰謀が渦巻く。

下級后妃の話だけれど、厠に行っただけで帰らないものもいたと聞いている。

命を奪われないまでも嫌がらせは日常茶飯事だろう。

「……待っています」

鈴花は竜蒼の胸に顔を埋めた。

今度は反射ではない。自分の意思だ。

彼が好きだった。ななつも年上なのに、自分の前で子どものように泣く青年が。

自分が彼の役に立てるか、力になれるかはわからない。

それでも一緒にいたいと思った。

竜蒼の背中に腕を回し、力を込める。

「ときが来るのを待っています。だから……」

もし蕾のままでいらなかったとしても、側にいさせて欲しい。
皇后でなくていい。召使いとしてでも、彼の雑事を執り行う婢としてでもいい。

竜蒼が苦しんでいるときに、抱き締めてあげられる場所にいたかった。

天領の姫としての力を持たない自分にも、きっとそれくらいなら出来る。

「はい。……待っていてください」

風が、さやさやと林を揺らす。

鈴花は幸せを感じていた。たとえ現実には一瞬に過ぎなくても、このぬくもりは胸の中に永遠に灯る。そう、信じた

「口付けくらいはしたのですか？」

帰りの輿で獅皇后に聞かれた。

もちろん聞かれて困る相手はここにはいないものの、だれが、だれと、は口にしない。

彼女の後ろで竜蒼が苦虫を噛み潰したような顔をしている。もちろんまだ侍女の格好だ。

鈴花は答えなかったが、獅皇后はうなずいた。

「それは重畳。あのいやらしい男も、唇だけは見逃してくれますからね」

彼女の口元は扇で隠されていたけれど、瞳には悲しみの色が浮かんで見えた。

一ヶ月が経った。

このまま皇帝が戻らないのなら、ここでの暮らしも悪くない。

鈴花はそう思うようになっていた。

ときどき事実を忘れそうになる。自分は皇帝に嫁いだのではなく、いまも竜蒼の許婚で彼を待っているだけなのだと、都合の良い妄想に溺れてしまうのだ。

……いけないいけない。

気を引き締めて、鈴花は目の前の書を広げた。

糸でつながれた竹簡には竜天国の伝承が刻まれている。

竜亡き後、天に戻ろうとした天女をみなが止めた。

彼女の力がなくなれば、竜に蹂躪された大地が痩せ衰えるからだ。

天女は天に戻る前に夫の遺体を国中に振り分けた。

竜宮のある場所に頭、背骨の先に尻尾、左右に翼。竜の食らった力が戻り、国は潤った。

いまも大きな州の名前は、そこに眠る竜体の部位を示している。

「天夫人」

国のすべての書を集めた秘書省で声をかけてきたのは、さっきまで尚宮府と一緒に婦礼について考えていた、鹿夫人だった。

派手な飾りはつけていないが、やわらかそうな髪はゆったりと波打っている。

鮮やかではないものの落ち着いた色合いの服装と相まって、一緒にいるものを安らがせてくれる雰囲気がかもし出されていた。

鈴花よりひとつふたつ年上だろうか。

おっとりした性格の持ち主で積極的に主張することは少ない。けれど時折口にする言葉には、だれにも侵すことの出来ない覚悟が感じられる、不思議な女性だった。

本来后妃には平等に情けを賜るのが皇帝の義務だ。

今上帝は役目を果たしていない。

一時の虎夫人に対するように偏った寵愛をする。第二皇子碧が后妃を身籠らせるなどという愚行に及んだのも、結局皇帝による後宮管理が疎かだったからだ。

鹿夫人は身籠った后妃の異母姉であった。

彼女も彼女の妹も、皇帝自身の情けは受けていないという。

「こんなにちは、鹿夫人。なにかお調べになられるのですか？ あ、お邪魔でしたか？」

棚の前から体を避けると、鹿夫人は笑って首を横に振る。

「いいえ。天夫人をお見かけしたので、追いかけてきたのです」「そうでしたか」

鈴花は微笑んだ。

後宮の暮らしを受け入れつつあるのは、皇帝が来ないからだけではない。

彼女や獅皇后が気を配ってくれていることも大きかった。

もつともだからといって、いつか竜蒼の時代が来たときに、鹿夫人と彼を共有出来るかといわれたら、血が冷えるのを感じてしまうのだけだ。

「実家から花茶が届いたのですが、よろしければ一緒にいかがでしょう？」

鹿家は、貴族としてはそれほどの地位はない。

しかし代々商売的な才があつて、珍しい物品や金銭には事欠かないという。

「ありがとうございます」

もちろん鈴花が鹿夫人を好ましく思うのは、そのためではない。慣れない自分に声をかけ、こうして誘ってくれる気持ちが嬉しいからだ。

「虎夫人も一緒なのですよ」

鈴花は止まってしまった。

虎夫人。第三王子玄の亡くなった母親と同じ家の出だ。とはいえ玄の母ほどの寵愛は受けていない。情け自体受けていないはずだ。

もう何人目になるのだろう。なぜか虎夫人は寿命が短い。皇帝の関心を得られないと、すぐに儚くなってしまうのだ。

いまの虎夫人は、鈴花と変わらない年ごろだった。

「も、申しわけございません。わたし、用事を……」

「お探しましたわ、秋葉様」

秘書省に甲高い声が響き渡る。

鹿夫人を字で呼んだのは虎夫人だった。字は夏蓮。この国では竜と天女の血に守られた皇族以外の人間は姓名はあまり使わず、字で呼び合っている。

虎夫人は西域の血が濃い。

黄色を越えて黄金に近い髪の毛が窓からの光を照り返している。

肌は褐色、小柄なわりに手足が長い。

十二年間会っていないし噂も聞こえてこない竜玄もこんな風に成

長しているのだろうか。

……竜玄様は男性だから、もっと大柄でいらつしやるのでしょ
うね。

頭の左右に広がった流行の鬘は、煌びやかな簪や髪飾りで彩ら
れている。裳には赤や緑で染めた羽と、細かく砕いた真珠が散りばめ
られていて、虹色に輝いていた。

新しい流行を作るのは獅皇后だが、それを真似て広げるのは虎夫
人だった。

鈴花の存在に気づき、虎夫人の細い眉がゆがんだ。

「本日のお茶会、天夫人も一緒ですの？」

「ええ」

ぽわあん、という感じで鹿夫人がうなずく。

ふたりの間に漂う空気を察していないわけではないだろう。

むしろ気づいているからこそ、ともに過ごす時間を作ろうとして
いるに違いない。

「わたくしたち、同じ夫人同士なのですもの。三人で仲良くしたい
ですわ」

すっかり逃げ出す気だった鈴花だけれど、彼女の声音には逆らえ
なかった。

「そ、そうですね」

ふつと鼻で笑い、虎夫人が胸を張る。

「もちろんです。わたくしと秋葉様は前から仲良しですけど、天夫
人はまだ後宮にいらしたばかりでお友達がいらつしやいませんもの
ね。仲良くして差し上げますわ」

感謝しろと視線が言っている。この上からの態度が、どうにも苦
手だ。

「……ありがとうございます……」

……わたし、自分が天領の姫だということで自惚れているのかも
しれないわ。

自省しつつも、いつか竜蒼が皇帝になったら、彼女だけは

解放して実家に帰して欲しいと願わずにはいられない鈴花だった。

竜花の約束（後書き）

<『獅子と蛇の終幕』につづく>

獅子と蛇の終幕

唇は、惚れた男のために取つとけよ。

思い出しただけで腸が煮えくり返る。

この状況もだ。

獅晶波は夫を睨みつけた。体は宦官に押さえられている。自由になるのは視線だけだ。

青皇帝こと竜青の手には竹簡がある。

初めて見るものだが、なにが書かれているかは想像がついた。

いまの晶波を見たら鈴花は戸惑うだろう。

いや、後宮の後妃たちはみな驚くに違いない。

獅皇后は殺気を放っていた。

大きな口に薄笑いを浮べ、竜青が尋ねてくる。

「……なにか、言いてえことはねえか？」

晶波は両脇の宦官に軽く視線を送った。

「このものたちは年増好みなのですか。やけに体を触られました」

竜青は吹き出した。

「そりゃあ仕方ねえ。獅家のお嬢さんは、どこに毒を隠してやがるかわからねえからな」

言いながらも晶波を甘く見ている。

尋問なら対応の部屋でするべきだ。ここは後宮内の皇帝の寝室。

皇帝と皇后の距離は近いし、晶波は手かせも足かせもつけられていない。身体検査にしたところで、竜青を案じる宦官に言われて実行させたに過ぎないだろう。

椅子に座った竜青が手を伸ばし、広げた竹簡を見せてくる。

晶波は首を伸ばした。宦官たちは体を押さえる力を弱めてくれない。

案の定そこには、虎家と敵対している貴族の名前が並んでいた。

皇帝暗殺計画の連判状。もちろん偽造だが釈明の機会は与えられないだろう。

こんなところで取り調べるのは晶波を見下しているからではなく、裁判もせず、自分の手で始末をつけるつもりだからなのかもしれない。

長年連れ添った自分への情が、多少はあるのか。

あるいは虎家の入れ知恵か。

連判状の一番前にある名前が息子竜蒼ではなく、自分であることに安堵する。

安堵しながら不思議に思う。

虎家がもつとも邪魔に思っているのは竜蒼のはず。息子の名前を書くことを押し止めたのはだれだ。竜青にも父親の情というものが存在していたのか。

いや、ありえない。最愛の女が産んだ息子、竜碧でさえ処刑した男だ。竜蒼と晶波が庇わなければ、本当に殺していただろう。そんな男が後ろ盾を得るために娶った女の産んだ子どもに愛情を向けるはずがない。

晶波は溜息を飲み込んだ。

考えても仕方がない。もう自分は逃げられない。反逆の罪の連座で父の獅公がいる骨州に官軍が押し寄せるころには、とくに自分は死んでいる。

自分を慕ってくれる侍女たちのことも助けてやれない。それが辛い。

……竜蒼は竜蒼でどうにかするでしょう。

もうどうしようもないので、そう思うことにした。
出来なくても死ぬだけだ。

皇太子として生きること壊れてしまった息子だが、生き延びたならきつと彼女が癒してくれる。

天領の姫は竜青には渡さない。

「……役立たず……」

晶波のつぶやきに、竜青が眉を上げる。

「言いたいことはないかとおっしゃるので言ったまでです。役立たずの旦那様」

「おいおい、衝撃の告白だな。蒼は俺の子じゃねえとでも言うのか？」

「そういう風にしか考えられないところが役立たずなのです。翔の都に入って一番に命じたことが美女狩りとは皇帝が聞いて呆れます。ああ、でもそうでしたわね。各地で起こった反乱に加担したのは、官軍から兵糧を奪うほうが儲かるからですものね。あなたはただの野盗の親玉。……竜姓ですらない」

竜でないものが皇帝を名乗れば忌まわしいことが起こるという言い伝えを知らないわけではないだろうに、宦官たちは顔色ひとつ変えなかった。

仕える皇帝の血筋が本物だろうとなかろうと、彼らは政変さえ起こらなければ良い。後宮がなくなれば行くところもなくなる存在だ。古い伝承など信じていないのだろう。

「美女を集めたはいいけれど、平等に相手をすることも出来ない。満足な管理も出来ない。これを役立たずと言わないで、なんと言えば良いのです？」

竜青の顔からも余裕が消えてない。この分だと、虎家も知っているようだ。

獅家から距離を置くようになったのは、竜玄の母に夢中になったからではなく、虎家に秘密を知られたからだだったのかもしれない。真面目な竜蒼に罪悪感を植えつけた事実、虎家にとっては上手い汁を吸うための良い道具に過ぎないのだろう。

竜碧が荒れていたのも、そのせいだろうに。

当事者ではないというのは気楽なことだ。

晶波は頂垂れた。

そつと舌で奥歯を押す。

抜かれた親知らずの代わりに置かれた陶器の奥歯は、しかるべき

場所を押せば齒茎から外れる。中には骨州名物の毒が隠されている。身体検査で口腔を診られることは承知の上で、わからないよう偽装していた。

獅家の人間が毒を隠し持っていることは、竜天国に知らないものはいない。

それが真実だということは竜青にも教えていた。もっとも場所だけは秘密。爪や髪だと思わせるよう振る舞ってきた。

これを使うときが来たらしい。

しかしまだ早い。もうひとつだけ確認したいことがある。

「本当に役立たず。国はなにひとつ変わってない。民は不作と飢饉に苦しみ続けてる。こんなことなら前の皇帝のままで良かったでしょう。下賤の男が本当の皇帝になれるとも思っていたのですか？

竜を真似ても蛇は蛇。草むらで震えていれば良かったのに」

「……天領の姫が皇后になりや、竜姓だろうとなかろうと、俺が皇帝だ」

なるほど。竜青の気持ちはわかった。

人間、死ぬ前は必死になる。

病で先が短いことを悟り、彼はニセモノではなく本物になりたくなったのだ。ただの後妃ではいけない。天領の姫を皇后にするものが真の皇帝だ。

竜天国最初の皇帝にしたって、天女を皇后にしなければただの化け物だった。

彼の気持ちはわかったが、晶波だって死が近い。必死にならずにはいられない。

天領の姫を皇后にすることは許さない。

息子の竜蒼のためだろうか。

いや、違う。晶波は奥歯を舌で押した。噛み砕く。

だれにも竜青は渡さない。

本当は驚夫人だって殺してしまいたかった。

口腔にあふれた毒を唾液で練って、左右の宦官に吹き付ける。

「うつ！」

「あぁっ！」

ふたりが床に膝をつく。

周囲の宦官たちがざわめいた。

「てめえっ！」

だれよりも早く剣を抜いた竜青の懷に飛び込み、晶波は夫と唇を重ねた。

初めて知る男性の唇は薄かった。

指先で彼の頬を辿る。戦場暮らして無精ヒゲが生えたままだ。

美しいという言葉は似合わないけれど、整っていて精悍な顔。酒浸りで戦いに明け暮れていたせいで崩れた雰囲気はあるが、それでも視線を奪われる。

竜ではないものの、力強い野生の蛇だ。

きつとだれにも飼い馴らせない。

胸が熱かった。

動悸が高まる。激しい痛みが体を貫いていた。

竜青の剣が心臓を抉っている。衣が赤く染まっていく。

だけど構わない。晶波の舌は竜青の唇を割り、彼の口腔に毒を流し込んでいた。

薄い唇の端から垂れる血は、毒のせいかな病のせいかな。

竜青が乱暴にそれを拭うのを見つめながら、晶波は床に崩れ落ちた。

こんなに幸せな気分になったのはいつぶりだろう。

もしかしたら生まれて初めてかもしれない。

「陛下っ！ だから申し上げたのです。反逆者と直接お会いになるのは危険だと……」

「うるせえ、黙れっ！」

抱き上げられるのがわかった。

硬く逞しい夫の腕。あまりに背が高いので、初対面のときは熊かと思った。

「バカか、お前は。せっかく氣い使ってやったのに、なんだってこんなバカな真似……」

……だって。

ずっと彼と口付けたかった。

幾度夜を過ごしても、子を生しても、夫は口付けてくれなかった。息子を太子にはしてくれた。翔の都に入っても晶波を廃しはしなかった。皇后のままでいさせてくれた。

けれど晶波は口付けが欲しかった。

ただ一度だけでもいいから　だって言っただじゃない。

たとえ親の都合で政略結婚したって、口付けだけは惚れた男として。ろって。

惚れた男が相手なら、片想いだって構わないでしょう？

あなたはわたくしのもの。この一瞬だけは。

たとえ冥界に降りれば竜碧の母に取り戻されるとしても、この一瞬だけは晶波のもの。

ふっと、腕の中の女が軽くなった。

年を経ることにあどけなさを増した、不思議な美貌が色を失っていく。

華奢な皇后くらい、もとかから片手で抱ける。

竜青はいっぱうの手を伸ばして晶波の臉を閉じた。

それからふつくらした唇の端から漏れた血を拭う。指先で互いの血が混じる。

紅を引いた唇は、まだ温かい氣がした。

周囲の宦官がなにか言っているようだが、少しも耳に入っていない。

意識も薄れていくようだ。

毒が効いてきたのだろ。病による腹痛ももう感じない。

……俺は、なんだって皇帝になりたいだなんて思うようになったんだ？

いくら先が短いからといって、長年連れ添った皇后を無実の罪に陥れてまで、天領の姫を皇后にする必要はなかったのではないだろうか。

晶波に言われたように、官軍に与えられるわずかな恩賞よりも、官軍を襲つて得られる兵糧が目当てで反乱軍に与した。

生まれつきとケン力で鍛えた大柄で逞しい体は戦いには向いていた。

みなに英雄と褒め称えられて良い気になって、宴席で冗談交じりに竜姓なのだと言つたら本気にされた。まさか獅公まで騙されるとは思わなかったが、そこまでいくと否定も出来なかった。

寄せ集めの反乱軍に獅公の私兵が加わり、腹を満たすことではなく国を変えることが目的になった。そんな大それたこと出来るはずがなかったのに。

初夜に真実を打ち明けたとき、晶波はなんと言つただろうか。

貴族なんて大嫌いだった。

飢えたこともない姫君なんて、好きになれるはずがない。

即位すれば嘘がばれるに決まってるのだから、その前に姿を消す。獅家の令嬢との仲はそれまでのつまみ食いに過ぎない。

女に不自由したことなどなかった。羽振りさえ良ければ、女はいくらでも寄ってくる。

竜壁の母親のように、だれだって自分の飢えを満たすことしか考えていない。

世間も苦勞も知らないくせに、民の窮状に胸を痛めていた姫君は、竜青の告白に微笑んだ。それは覚えている。

あまりに邪気のない笑顔を見ていたら、触れるのが怖くなったことも。

少なくとも唇を重ねることだけは許されなかった。

だれが言っていたのだろうか。

言葉には魂が宿る。その言葉を吐き出す唇は、心の一番深いところに通じている。

だれに聞いたかは思い出せなかったが、竜青はべつのことを思い出した。

そうだ。絵姿で見た天領の姫は、少しだけ若いころの晶波に似ていた。

なんとなく丸いところと、ふつくらした頬。よくつねって怒らせただものだ。

竜青は自分の本当の姓を思い出せなかった。最初からなかったのかもしれない。

先帝の御世はだれもが飢えていた。顔もわからない竜青の母親だって、食べるためならだれとでも寝ただろうし、父親が逃げたのなら子どもを育む気力も出なかっただろう。

自分でつけた青という名前を聞いて、空の色だと言ったのは晶波だ。

そんなつもりはなかったのに、言われた途端そうだと思った。青い空が好きだった。

本当は最初からわかっていたのかもしれない。

こんな状況になれば、皇后がこう行動することは。

ひとりで死んでいくのがイヤだっただけかもしれないと告げたら、無実の罪に落とされた晶波はどんな顔をしただろうか。

最初から本気で処刑する気はなかった。どんなに虎家に言われても、それだけは食い止めた。自分さえ死ねば後は竜蒼がなんとかすると信じていた。

虎家だって竜天国を根底から揺るがすような真似はしない。

竜玄を皇帝にするためにも、青の秘密は隠し通すだろう。

目がかすむ。

空気が揺らぐ。視界に蠢く影はだれだ。

宦官だとはわかつていいる。わかつていいるけれど……べつのだれかなら良いと思う。

そのだれかに、心の中で尋ねてみる。

……なあ、だれのためだったんだよ。

後宮に入った晶波は、どんどん美しくなっていた。

新しい髪形や服装を考案し、化粧だって次々と開発していった。気に食わなかった。出会ったころの姿が一番好きだった。口には出さなかったけれど。

好きな男が出来たのなら、青など捨てて行ってしまうえば良かったのだ。

いや、美女狩りの時点で愛想を尽かしていれば良かったのに。

あの夜聞いた晶波の声が蘇って耳朵を打つ。

たとえそれが本当のことだとしても、青様なら大丈夫ですわ。民の苦しみをだれよりもわかってらっしゃるのですもの。わたくしも及ばずながら力をお貸ししますので、立派な皇帝陛下におなりくださいませ。

毒を吹きかけられた宦官のひとりは毒が目に入って失明し、のちに自害した。もうひとりは毒を拭った指が口に触れ、そのまま死んだ。

雌獅子と竜になりたかった蛇は、抱き合う姿で息を引き取った。

反逆者と皇帝と一緒に葬れるはずがない。けれど、竜青の手は晶波の手を握ったまま固まっていた。宦官たちがなにをしようと離れることはなかった。

獅子と蛇の終幕（後書き）

『虎の誓い』につづく

虎の誓い

鈴花は首を傾げた。

今日はまだ獅皇后の迎えが来ない。

皇后をはじめとする上級后妃には一軒家が与えられているが、昨夜急に戻った皇帝は自分の寝所に獅皇后を呼び寄せた。

本来なら伽の順番には細かい決まりがある。

その辺りのいい加減さも、今上帝の問題点のひとつだった。

……でも良かった。

呼ばれたのが自分でないことに安堵していた。

安堵しながらも、今上帝が竜蒼だったらと思うと背筋が凍った。あのときうなずいたのは間違いだった気がする。

竜蒼は真面目な青年だ。まあ女装してまで鈴花に会いに来たのはともかくとして。

彼は後宮の掟を蔑ろにはしないだろう。

百二十人前後の後妃たちに対して、公平に接するに違いない。

どれくらいの周期で会えるのか。

そして、彼がほかの後妃と過ごす時間をどう耐えれば良いのか。

鈴花にはわからなかった。

「今日は尚宮府での会合はないのでしょうか？」

仮面の宦官、幽海は答えない。

彼にもわからないのだ。

部屋で楽器の練習でもしていようか。

会合がないのなら、鹿夫人を誘って尚功府を覗きに行くのもいいかもしれない。完成品や外から仕入れたものは内侍省で売っているが、召使いたちが作っている途中の細工ものを見せてもらうのも楽しいものだ。

たぶん向こうにしてみたら、上級后妃に見られても緊張するばかりだろうが。

尚服府に頼んだ羽を飾った裳はまだ出来ていないと思うから、羽律苑の舞台で、宦官劇団の公演を見てもいい。

鹿夫人となら、どこに行っても楽しいはずだ。彼女は少し獅皇后に似ている。

けれど。

……虎夫人も一緒にいらっしやるでしょうね。

そこに思い当たり、鈴花は溜息をついた。

虎夫人は鹿夫人に懐いている。

魔鏡の仲だと噂されているほどだ。

後宮の掟では罪になるものの、鈴花は個人の嗜好に口出する気はない。

父親の後宮でその死を願い、彼の息子が迎えに来る日を待ち望んでいる自分以上に罪深いものなどないだろう。

……虎夫人と仲良くなるための好機と思えば良いのだわ。でもおふたりが本当に魔鏡の仲だとしたら、わたしはお邪魔なのかしら？
新たな悩みが生じたとき、ひどく慌てた様子の侍女が客の訪れを告げに来た。

思っていた以上に大きくなっていた。

服の上からでも筋骨隆々とした体がわかる。

竜天国の衣装が似合わないことを自覚しているのか、服の上から大きな虎の毛皮を纏っていた。野性的な雰囲気は彼の魅力を引き立てている。

蒲公英のようだった黄色い髪が煌いていた。

虎家の血を引きながら、話に聞く南方の獅子の鬣のようだ。

褐色の肌。鋭い眼光を放つ青い瞳。唇は固く引き締められている。だけど。

「竜玄様！」

鈴花は真っ青になって、彼に駆け寄った。
相変わらず鈴花よりも大きい。

十二年も経っている。なのにすぐに竜玄だとわかった。そして心配になった。

「後宮は皇帝以外の男子禁制ですよ。こんなところに入ってきてはいけません。ほら、わたしが上手く誤魔化してあげますから、早くお逃げなさい！」

青い瞳が細くなる。

「変わらないですね、あなたは」

低い声が甘く耳をくすぐり、ぞくりとする。

あわてて目をそらす。

「か、変わりません。何百年経とうとも、わたしはあなたよりふたつ年上なのですから」

なぜだろう。心が子どもに戻ってしまう。

竜蒼と会ったときはこんな風ではなかった。

許婚である彼とも十二年間会っていなかったけれど、手紙の竹簡や贈り物で間接的に接していたからだろうか。

竜玄の十二年間はまるで知らない。

だからどうしても七歳のときと同じ接し方になる。

どんなに大きくても可愛い弟分のままだ。大切に守ってあげなくてはならない。

「あ、でも」

竜玄の口元が綻んだ。

「もう自分のことを名前ではお呼びにならないのですね」

からかうような口調は五歳のころにはなかったものだ。

ちゃんと成長しているらしい。

「竜蒼様と同じことをおっしゃいますのね」

この兄弟の中にある、鈴花の印象はどんなものなのだろうか。

青い瞳が曇った。

「……蒼兄上にお会いになったのですか？」

「い、いえ！ そんなわけないではありませんか。後宮は男子禁制です。……ああもう！」

鈴花は、竜玄の大きな腕を叩いた。

「くだらない話をしていないで、早くお逃げなさい。ここはわたしが食い止めます」

竜玄が吹き出した。

大きな体を丸めて笑い転げる。

「その細い腕で官軍を相手になさるおつもりですか？」

「うつつ……」

鈴花は帯から薬を入れた袋を取り出した。

後宮に入るときに用意したものだ。竜宮の百花から作られている。ちゃんと許可も受けていた。

「怪我をしたときのために、これをお持ちなさい。使い方は薬の内袋に記してあります」

「義姉上……いいえ、鈴花殿」

笑い過ぎで滲んだ涙を拭い、竜玄が体をかがめた。

鈴花と視線を同じ位置にする。

「背中が痛くないですか？」

筋肉痛に効く薬も袋に入れていただろうか。

「大丈夫です。……鈴花殿。昨夜父が亡くなりました」

一瞬、なにを言われているのか理解出来なかった。

竜玄の青い瞳に鈴花が映っている。

迷子になった子どものように頼りなげな表情だ。

言葉を絞り出す。

「皇帝……竜青皇帝陛下がですか？」

喜んでいいはずだ。そのはず　なのに嫌な予感に胸がざわめく。

ドウシテ、ココニイルノガ彼ジャナイノ？

竜玄は鈴花の問いに首肯して、話を続ける。

「そうです。獅皇后を尋問中に殺されました」

「だ、だれにですか？」

本当に聞きたいのはそんなことではない。

ドウシテ、ココニイルノガアナタナノ？

「獅皇后……いえ、反逆者獅晶波にです」

「こ、皇后陛下は……」

聞かされても信じられないし、呼び捨てにすることも出来ない。

「皇帝に斬られてお亡くなりになりました」

「そう、ですか」

鈴花はうつむいた。

もうこれ以上なにも聞きたくない。耳を塞ぎたい。

「反逆者の名簿に竜蒼という名前はありませんでした。実母の行動を知らなかったとは思えません。獅家は反逆罪に連座、蒼皇子は死罪だけは免れますが一生軟禁されます」

力が抜けた体を竜玄が抱きとめる。

「新しい皇帝には俺が即位しました。これから骨州に獅家討伐に出立します。皇后となるあなたにもついてきて欲しい」

男の匂いに包まれる。

竜玄はそのまま鈴花を抱き上げた。立ち上がり、歩き出す。

最初から気づいてた。わかりたくなかったただけだ。

彼の後ろには宦官たちが控えていた。

後宮に入ることが許されていない人間に、彼らがつき従うはずがない。

大きな手が鈴花の目元を覆う。

「……良かったら泣いてください……」

涙が出れば楽になれただろう。

けれど鈴花の瞳は乾いていた。

瞼を閉じると、落河で見た花の姿が浮かんでくる。くるくると回る。

……どこまで流れていけばいいの？

いつそのまま水底まで沈んでいけたなら、なにも考えなくて良くなるのに。

竜玄の胸は温かく、それが胸を締め付けてならなかった。

獅家討伐に出立する新しい皇帝の軍には、小さな宮殿並みの機能を持つ輿が同行していた。天皇后のためのものだ。

竜天国中央、東西を右州と左州に挟まれ、南北を頭州と尾州に囲まれた骨州に向かう。

獅皇后の故郷であり、先帝竜青の出身地でもある。

始祖である竜の背骨が大地に埋まっているといわれながらも土地が貧しく、不作になると真っ先に飢饉となる場所だ。それでいて、なぜか薬や毒の産地として名高かった。

「……父が立ち上がったころの飢饉は特に激しく、同じ村の親同士が子を交換して食らうこともあったといいます」

何十頭もの馬に牽かせた巨大な輿は、船のようにゆるやかに揺れる。

皇后の主寝室にいるのはふたりだけだ。

皇帝は皇后を膝に抱いて、耳元で囁いている。低い声が子守唄のように心地良い。

心地が良いが聞いていても話が頭に入ってこない。

鈴花の胸には、その三十年ほど前の惨劇に対する哀れみは沸いてこなかった。

……わたしはきつと、冷たい人間なのだわ。

だから天領の姫としての力に目覚めないのだろうか。

「獅家は私財を投げ打って民のために尽くしました。虎家が朝廷での力を伸ばしたのは、このとき獅家の力が弱まったからです。ですが獅家の財力をもつてしても国は救えなかった。獅晶波の父である先代獅公は、国庫に眠る食料を人民に解放するよう訴えましたが、先々帝と側近たちに聞く耳はなかった」

税として召し上げられた食料は、国庫に眠ったまま腐っていった。追い詰められたひとびとが各地で蜂起したのも当然だろう。

その中には先帝竜青もいた。

彼は獅晶波を娶ることで獅家の援助を受け、遂に当時の皇帝を倒して即位した。

鈴花も歴史書を読んで知っていることだ。

「本当は父が即位するべきではなかった。ただほかに方法がなかった。竜姓だというだけで、なんの功もない人間が皇帝になったのは結局国が乱れてしまう」

けれど、と竜玄は顔をゆがめた。

「竜姓でない父が皇帝になったのも間違いだった」

鈴花は反射的に彼の唇に指を当てた。大きくて薄い唇だ。

そんなこと考えたこともなかった。

信じていいのかわからない。天領の姫としてどうすべきかもわからない。

ただ、それをほかのだれにも知られてはいけないのだということ
は理解出来ていた。

竜でないものが皇帝を名乗れば忌まわしいことが起こる。いろいろな説があるものの、大地に埋められた竜が暴れて不屈きものを退けるという説が最も一般的だ。

言い伝えに過ぎないとしても、民には衝撃が走り国は乱れるだろう。

大きな手が鈴花の手を包む。異民族の血のせいだ。彼の体温はいつも高い。

竜玄は自分の唇から、鈴花の指を離した。

「虎家はそれを知って父を脅した。あなたが蒼兄上ではなく父に嫁がなくてはいけなかったのは、天領の姫による権威付けが目的です。父が亡くなると彼らは俺に目をつけた。真実を明かして俺が退位するのは容易いけれど、それでは蒼兄上も地位を失ってしまう」

黄色い髪を揺らして、彼は言う。

「鈴花殿。あなたは蒼兄上の、本当の皇帝陛下の皇后です。獅家には何度か公主が降嫁しているのだから、父の血筋など問題ではない」
しかしそれを大声で言うのは憚られる。

後宮という仕組みからもわかるように、竜天国は男系社会だ。血筋は常に父親のものが尊ばれる。子どもが受け継ぐのは母ではなく

父の姓だ。

唯一の例外が天領であり、竜宮であった。

ここでのだけは竜の皇帝の血よりも、天女の血を引くことが重視される。

「俺は……あなたと蒼兄上が、天女が真の竜と結ばれることだけを望んでいます。いまはなんの力もない虎家の傀儡ですが、やがて力を得て、おのれの手で帝位を蒼兄上にお返しします。もちろんそれまであなたに不埒な真似などいたしません」

虎が誓う。

鈴花は彼の顔を両手で包んだ。喜んでいいはずなのに、心が風いている。

「竜玄様……泣かないで」

青い瞳は潤んでなどいないのに、なぜか彼が泣いているように感じてしまう。

「泣いてなどいません」

そう言い切る竜玄の腕。袖から覗く太い腕には包帯が巻かれている。

十二年前に自分が薬で治療したのと同じ場所だ。

軟禁されている竜蒼のことを想う心と目の前の竜玄の腕が気になる心で、鈴花はふたつに引き裂かれていく気がした。

竜玄が膝の上の鈴花を抱き締める。

これは演技だ。

虎家を騙し、竜蒼を救うための演技に過ぎない。

自分を抱き締める太い腕は、十二年も会っていなかった、ほとんど初めて会う男のものだ。そこに心を惑わされる理由などない。ないはずだ。

ドウシテ？

後宮で再会したときから、青い瞳が鈴花を逃がしてくれない。

どうして竜玄は、いつか異母兄に返す皇后をこんなに熱く見つめるのだろう。

胸の奥に灯った炎の意味を、鈴花は知らなかった。

虎の誓い（後書き）

『虎の想い』につづく

虎の想い

遠征に出て、どれほどの日数が過ぎただろう。

骨州に入るなり戦争が始まるのかと思っていたけれど、そうではなかった。

以前ほどではないにしろ、骨州は不作と飢饉に苦しめられている。飢えを満たすために食らったのか。春だというのに、街道沿いには野の花がない。

帝都翔から州都立までは、どんなに急いでも三ヶ月はかかる。

大きな輿が一緒ならば、さらに時間がかかるだろう。

獅家の主だった人間は立に集まっていると聞く。

反逆が真実であれ偽装であれ、皇帝が軍を率いてやって来るのだ。弁明するにしろ抗戦するにしろ力が必要だ。

時間がかかればかかるだけ獅家は結束し強敵となる。

鈴花の存在は軍のお荷物だった。竜宮の姫は馬に乗れない。どうしても輿がいる。

お荷物でいて必要不可欠な存在でもあった。天領の姫を皇后にしたということで、虎家に反感を持つ貴族たちも渋々ながら竜玄の即位を認めたらしい。

獅家との決戦が始まれば近隣の貴族たちが馳せ参じることだろう。竜玄が獅家の血を引く異母兄に皇帝としての正統性を認めているように、竜蒼のほうが即位すべきだと主張するものは多い。先帝青が戦い以外では役立たずだったせいもあり、獅皇后は反逆者ではなく真に国を思った天女の化身だと称えるものもいる。

いざというとき竜玄に従うものを増やすため、鈴花はいるのだった。

もつとも皇帝の真意はわからない。

彼は本当に獅家を討つつもりなのだろうか。

いずれ竜蒼を帝位につけるのなら、後ろ盾となる外戚は残してお

いたほうが良からう。

「……鈴花殿……」

主寝室の扉を開け、竜玄が呼びかけてくる。

彼は日々忙しい。

兵士や自分自身の鍛錬もあるし、皇帝としての勉強もある。同行している虎家の人間の主張を聞いて、いまから骨州の分配について会議もしているようだ。

もちろん翔都と連絡を取り合って、竜天国自体の政策も決めている。

鈴花のほうはすべきことはなにもなかった。

虎家中心の会議には参加させてもらえなかったし、侍女はいてもほかの後妃はいないので、婦礼について考える必要もない。裁縫や音楽などの娯楽は用意されていたものの、あまりその気にはなれなかった。

竜玄とは毎夜ともに過ごしていたけれど、もちろん伽を行うことはない。

ただ同じ部屋で眠っているだけだった。

秘密話をするときには膝に抱かれて顔を近づけているが、睡眠を取るときのふたりの間には竜玄の剣が置かれている。彼と同じように大きな剣だ。

鈴花は、胸に穴が開いたように感じていた。

自分がどうするべきなのかを見出せない。

後宮ならば、たとえ皇帝が変わろうとも后妃にも召使いにも婢にも役目があり、それだけは変わらなかつただろうに。

新しくつけられた侍女たちにも心を開けない。彼女たちは虎家の間者でもある。

結果鈴花は、一日の大半を眠るか眠った振りをして過ごしていた。このまま淡雪のように溶けて消えてしまいたい気分になることもある。

侍女に体を揺らされた。

「皇后陛下」

鈴花は瞼を上げなかった。

このまま寝た振りを続けよう。起きていても役に立てることはない。

ただいればいいだけのお飾り人形。

所詮はいつわりの花嫁だ。

衣装や装身具も用意されていたし、三日に一度は風呂にも入れてもらっている。

しかし着飾ることは虚しさしか呼ばない。

鈴花は清潔であること以外は気にしなくなっていた。

髪も結っていない。最近侍女のほうが華やかな姿をしていた。

さらさらと衣擦れの音が遠ざかる。侍女たちが部屋から出されたようだ。

すぐには鈴花を起こすまいとしているのだろう。大きな体の竜玄が、足音を立てずに近づいてくる。足音もないのに近づいてくるのがわかるのは彼の熱い視線を感じるからだ。

ちりちりと皮膚を炙られる。

あの青い瞳には、きつといま鈴花しか映っていない。

ふわりと空気が動く。

大きな手が鈴花の髪に触れる。

震えそうになる体を必死で止める。

持ち上げられた髪に、竜玄が唇を落とすのがわかった。

……やめて！

叫びたかった。

真実の皇后ならば笑いながら体を起こして、皇帝を抱き締めればいい。

巨大な軍の孤独な皇帝。彼を支持する虎家ですら味方ではない。

本なら皇后はただひとりの味方であるべきだ。

異母兄の悪ふざけで腕を斬られても、ただ泣くことしか出来なかった子どもにしたように癒してあげたい。不思議の力はないけれど、

百花から調合した薬は扱える。成長してお湯も沸かせるようになったので、薬効のあるお茶だつて淹れられる。

だけど鈴花は違うから、彼に対してなにも出来ない。なにもしてはいけないのだ。

だからやめてほしかった。心を乱さないで欲しい。

やめて欲しくてたまらないのに、やめないで欲しいとも願っている自分が、嫌で嫌でたまらない。そして、そんな気持ちにさせる彼が憎かった。

……竜蒼様。

十二年の月日を思い出そうとする。

届いた言葉、贈り物、そしてほんの少しだけ前の林の匂いと彼の熱。

だけど無理だった。記憶はおぼろげに漂うばかり。

いま側にいるのが竜蒼ではないということしか思い出せない。

かすかな甘い溜息のあと、竜玄は鈴花の髪を下ろした。

そっと、優しく鈴花を揺らす。

「……鈴花殿……」

低い男の声が甘く耳朶を打つ。

遠いむかし、竜宮の庭で泣いていた子どもと同一人物とは思えないほど大人びた声だ。

ふたつ年下の少年だ。これまでもこれから年齢の差は変わらない。い。

「……鈴花殿……義姉上」

だれにも聞かれないよう、こっそりと囁かれた呼び名に心臓がつぶされる。

竜玄にとっての鈴花は竜蒼のもので、それも年齢差と同じように絶対変わらない。

だけ。

あの腕の、袖の中に隠された腕の包帯の下にはなにがあるのだろう。

もしかしたら、もしかしたらあそこには。

……考えても仕方がない。

鈴花は、いま起きた風を装って体を起こした。

「……竜玄様？」

青い瞳を見つめると、少年は十七歳相応の笑みを見せた。

「お休みのところ申しわけありませんが、お願いを聞いていただけないでしょうか？」

「……はい、どのようなことでしょうか？」

彼はお飾り人形になにを願うのだろうか。

かつて竜宮で救いを求めるひとびとを前に覚えた無力感が沸き上がる。

それでいて胸がときめくのも感じる。

風に舞う花びらのように、水を流れる蕾のように、鈴花は翻弄されている。

ありえない。

ほんのわずかな邂逅だったけれど、鈴花は竜蒼と約束をしたのだ。竜玄の視線に捕らわれるなんてありえない。あつてはならないことだ。

それでも鈴花は、春を待つ花のように彼の言葉を待たずにはいられなかった。

櫛を持った侍女が、鈴花の耳を出して髪を整える。

左右に広げる髪型は反逆者獅皇后が発案したもののためか、以前流行していた、一度ひとつにまとめてから、後ろでベールのように広げる形にされた。

ひと房ごとに砕いた真珠を散りばめた布を絡め、まとめた部分に簪を刺す。

しゃらん、と揺れる。

なめらかに肌を滑る絹の衣、色鮮やかな裳には毛皮が飾られている。

かなり古い意匠だが、虎の毛皮を纏った皇帝の横に立つには相応しい。

宝石をあしらった金の首飾り、耳飾りには羊脂玉　最高級の玉。
侍女の筆が白粉と紅を載せる。

「皇后陛下、どうぞ」

鏡に映っているのは、鈴花の知らないだれかに見えた。
紅を落とさないように気をつけて、唇に指を近づける。

あの日、羽律苑の林で竜蒼と交わした口付けの記憶が重い。
重いと感じる自分が嫌だ。

腕を降ろし、軽く頭を揺らす。
しゃらん。

簪の鳴る音だけは幼いころと同じに聞こえる。
目を閉じると瞼の裏に竜宮の百花が蘇った。

なんの力もない天領の姫だが、飢えた骨州の民に食べものを配る
くらいは出来る。

虎家の反対を押し切って軍の兵糧を分け与えることを決めた竜玄
が、鈴花に役目を与えてくれたのだ。

……わたしに出来ること。

瞼を開ける。侍女たちが立ち上がるのを助けてくれる。

べつの侍女が部屋の扉を開けてくれた。

すぐ外で皇帝が待っていた。

鈴花を見ると息を飲み、それから悲しげに微笑む。

だれもいなかったら、こうつぶやいたに違いない。

『蒼兄上がご覧になられたら、さぞお喜びのことでしょう』　と。

差し出された大きな掌に指を預け、鈴花は輿の外に出た。
手は硬く、剣で出来たタコがいくつもあった。

無骨そうなその手が、羽よりも優しく自分に触れるのを鈴花は知
っている。

広がるのは骨州の荒れ果てた大地。

花もなく草もなく、骨のような木々が風に揺れている。

空は雲に覆われて灰色に染まっていた。

凍えるような気温ではないものの、春だとは感じられない。

そんな光景の中にあると、華やかな輿も巨大な軍も滑稽にしか見えなかった。

湯気を上げる大きな鍋の前にひとが並んでいる。

鍋をかき混ぜながら、兵士が大声で皇帝への感謝を強要していた。こちらの存在に気づいたのか、兵士たちがざわめき始めた。

骨州の民もこちらに向き、無数の視線が鈴花を射る。

むかし、竜宮にいたころは救いを求めるひとびとの視線が怖かった。

いまだってなにも変わっていない。

天領の姫としての力はないし、皇后としても実権がない。

しかし継るように自分を見る骨州の民を怖いとは思わなかった。

天領の姫に対する期待や憧憬も、皇后に対する願いや羨望も、苦勞知らずのお飾り人形に対する嫌悪や憎しみも、なにも怖くない。

一番怖いものは背後に立っている。

どんなに離れても絡みつき、けして消えようとはしない青い視線だ。

いや、怖いのは彼じゃない。

怖いのはぐらぐらと揺れる自分の心。

竜蒼を裏切ることではなく、裏切って竜玄に軽蔑されること。

虎の想い（後書き）

竜蒼は裏切れない
心に嘘はつけない

『虎花散華』につづく
『虎花乱舞』につづく

虎花散華

身も心も疲れているのだろう。

竜玄は一度眠ると朝まで目覚めない。

いっぽう日中寝てばかりの鈴花は、夜は起きていることが多かった。おそらく生活が夜型になってしまっているのだ。今日は骨州の民に食事を配るという役目を果たしたので、疲れて夜眠れるかと思っていたのだけれど、逆に頭が冴えて眠れないでいた。

皇帝と皇后の間には剣が置かれている。

巨大な金属の剣だ。

暗闇に座り、壁の細工から忍び込んだ月光に照らされた竜玄の寝顔を見つめる。

あどけない少年の顔。毎日大変なせいか、眉間に皺が刻まれている。

皇帝になる前は將軍の位にあったと聞いた。皇族のお飾り將軍ではなく、父とともに各地を回って争いを収めていた優秀な軍人だったという。

情報源が虎家から来た侍女たちだということを差し引いても信憑性は高い。

輿の外にいた兵士たちも、鈴花には複雑な視線を投げかけてきたが、竜玄に向けるそれは信頼と愛情に満ちていた。部下に慕われているのだ。

じつと竜玄の寝顔を見ていたら、竜蒼の顔が浮かんできた。

印象が違いすぎるので考えたことがなかったものの、ふたりとも口元がよく似ている。

唇が薄くて大きいのだ。父親似なのかもしれない。

……瞳は違う。

ぼんやりと鈴花は思った。

そう、瞳は違う。色だけでなく、なにかが違う。

なのにどちらも視線は熱い。鈴花を捕らえて絡みつく。それも父親似なのだろうか。

ふたりは、どうしてあんな瞳で自分を見るのだろう。不思議なのにわかる気もした。

胸の中、ただひと筋にだけかに向かう心は制御出来ない。

時間もつながらりも関係なく、ただ翻弄されるしかないのだ。なにひとつ自分の思い通りにならない。

側にいるだけで胸がざわめく。心臓の動悸が激しくなつて、息をするのも苦しくなる。

辛くて切なくて泣きたくなるのに、離れば体が切り裂かれそうに痛い。

気がつくとも目が追っている。視線を外すことは不可能だ。

「……竜蒼様が好き……」

自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

これからどうなるかなどわからない。

翔都で軟禁されているという竜蒼と骨州を進む竜玄の間に、意思の疎通があるのかどうかも鈴花は知らない。

竜玄が望み通り竜蒼を帝位に就けたとしても、彼が鈴花を望むとは限らない。

異母弟との仲を疑って、嫌悪されてしまつかもしれないではないか。

ふたりに密約があったとしても、計画が上手く進むという保証などない。

竜玄が力を持つ前に竜蒼が殺されてしまつかもしれないし、どちらとも異なる竜姓のだれかが皇帝になるかもしれない。

花はただ、流れに運ばれることしか出来ないのだ。

終着点など考えるだけ無駄だ。

目が燃えるように熱い。

「……竜蒼様が好き……」

もう一度つぶやく。

惜しみなく流れ落ちる涙の理由に、鈴花は気づかない振りをした。

数カ月後、玄皇帝は獅家の代表と和睦を果たした。

ときを同じくして、翔都で軟禁されていた竜蒼が宦官によって解放され、芳土宮内の虎家派を一掃した。獅皇后が陥れられたという証拠も見つかって彼女の復権が施された。

切り札だった先帝青の血筋の件は、虎家にとって諸刃の剣となっていた。

彼らはすべて承知の上で竜玄を即位させたのだから。

竜蒼と竜玄を罪に問うのなら、自分たちも問われなくてはならない。

虎家は状況を受け入れた。自分たちの権利と財産を守るためにはそうするしかない。

竜玄は最初の言葉通り退位した。

彼は即位した竜蒼に大將軍の位を賜り、和睦の証として獅家の娘を娶った。

異母兄弟たちの間には約束があったらしい。

それは事件を機に作られたものではなく、虎家の台頭によって話し合われ、先帝の病を受けて練られたものだったようだ。

鈴花は蒼皇帝の皇后となった。

流される花に逆らう意思はない。

そして三年の月日が流れた。

鈴花は身籠らなかった。

獅家出身の母を持つ竜蒼と天竜の姫である鈴姫が結ばれて子が出来れば、だれにも文句のつけようがない跡取りだったのだけれど、こればかりはどうしようもない。

後宮を廃止して鈴花ひとりを溺愛していた竜蒼も、皇后本人に望まれては后妃を迎えないわけにはいかなかった。復活した後宮に与えられた家で、鈴花は宦官から皇帝と后妃が結ばれたという報告を

受けて胸を撫で下ろした。

いま鈴花を補佐してくれている宦官は仮面をかぶっていない。

幽海はどこかへ行ってしまったのだという。

彼だけではない。

竜玄の即位時の混乱や竜蒼救出後の騒動で多くのものが行方不明になっていた。

鹿夫人や虎夫人ももういない。

後宮廃止の際に禄を与えられて解放された虎夫人は、両家の和睦の証として獅家に嫁いだという。先日 手紙をもらった。相変わらず上から目線だが元氣そうなので嬉しかった。

鹿夫人のほうはどうなったのかわからない。少なくとも鹿家には戻っていないかった。

……無事でいてくれれば良いのに。

無事で、出来るならば幸せで。

ほかの後妃に対しても、鈴花はそう望んでいた。

流されるしか出来ない花だから、いや、花だからこそ、美しく咲いていて欲しい。

後宮という存在が正しく必要なものかどうかはわからない。

けれど市井において女の仕事制限される時代に、さまざまな役割を担うことが出来る場所があるというのも悪いことではない。鈴花も皇后として政治に関わることで、天領の姫としての能力を持たない自分を受け入れられるようになった。

皇帝の寵愛を受けられなくても、後宮に在るということがだれかの誇りになればいい。

そう思う。

そう思えば いつかこの胸の痛みも消え去るのだろうか。

すべてを納得していたはずなのに、その夜、鈴花は泣きながら眠りに就いた。

後悔していたのは、竜蒼に后妃を娶わせたことではない。

……今日の朝議は休ませてもらおうかしら。

翌朝、ぼんやりと鈴花は思った。竜蒼と顔を合わせたくない。

「こ、皇后陛下！ 皇后陛下あつ！」

あわてた様子で侍女が部屋に飛び込んでくる。

「どうしたのです。朝から騒々しいですよ」

「大変です。皇帝陛下が、皇帝陛下が！」

鈴花は家を飛び出した。

後宮が赤く染まっている。建物が燃えているのだ。召使いや宦官たちが叫び声を上げていた。表の芳土宮のほうも燃えているようだ。輿を用意させている時間が惜しい。

駆け出しかけた鈴花の前に馬が立ちふさがった。獅皇后のころは羽律苑で乗馬を楽しむものも多かったけれど、いまはまだ后妃も少ない。見回りの宦官だろうか。

顔を上げ、騎乗の主を見て息を飲む。

「竜玄様……後宮は皇帝以外の男子は禁制ですよ？」

三年前よりも大人びた顔に微笑が浮かぶ。もう少年ではない。

獅家から娶った妻に子どもも出来、竜玄は一児の父となっていた。立派な大人だ。

鈴花は彼から視線を外した。

皇后として朝議で会話することもあるのに、なぜだろう。妙に気恥ずかしかった。

いや、いまはそんなことを考えている場合ではない。

大將軍である竜玄が後宮に入ってくるとはよほどのことだ。

反乱でも起きたのだろうか。

……ありえない。

思っただけに否定する。跡取りがいないこと以外では竜蒼は完璧な皇帝だ。

もう飢えている民はいない。

骨州は風土に合った作物の種を西域から輸入したことで、いまでは国で一番豊かな土地となった。その輸入には左州の虎家が関わっ

たため両家の絆も深くなっている。

異国からの侵略だろうか。

それもありえない。北には護山脈、東には落河、西には左州と骨州があり、南の尾州の向こうは砂漠だ。右州の翔都にまで攻め込まれる前に情報が来る。

「……鈴花殿……」

低く甘い竜玄の声に背筋が凍った。

侍女に異常を報告してきたのはだれだ。

いま、足元に転がっている宦官だろうか。彼は血塗れで横たわっていた。腹が破れて臓腑が覗いている。その腹を破ったのはだれだ。宦官は肩にも傷を負っていた。

肩から背中へと後ろから斬りつけ、思わずふり返ったところを馬の蹄が襲ったのか。

竜玄が手にした剣は血で汚れている。彼が乗る馬の蹄も血で汚れていた。

「どう、して……？」

鈴花は竜玄を見上げながら、建物のほうへと後退した。

ふたつ年下の義弟が笑う。

さっきの微笑とは違う子どもじみた表情だ。無邪気で、それゆえに狂気を帯びている。

「約束したのです」

「約束？」

「ふたりで、ずっと鈴花殿をお守りすると。そして、もし蒼兄上が鈴花殿を裏切ったときは、俺が鈴花殿をいただくと。だから」

いだだきに参りましたと片腕を伸ばし、竜玄は鈴花を馬上に抱き上げた。

太い腕には相変わらず包帯が巻かれている。彼の妻はその下を知っているのだろうか。

膝の上に乗せられ、男の匂いに包まれる。

竜蒼の匂いとは違う。

西域から輸入する香辛料の匂いだろうか。刺激的な香りが鼻をくすぐる。

相変わらず竜玄は体温が高い。

鈴花は微笑んだ。

「竜玄様」

「はい、鈴花殿」

「そちらの剣は、以前わたしたちが眠るときに間にあったものです。懐かしいので、よく見せていただけませんか？」

「いいですよ。でも鈴花殿。あなたの力では俺を殺すことなど出来ませんよ」

柄を持ったまま、竜玄は血に濡れた刃を鈴花に向けた。

花には流れを止める力などない。

だけど。

鈴花は竜玄から剣を奪う気などなかった。彼が持ったままの刃に体を落とす。

喉が熱い。竜玄の叫び声が、どこか遠くから聞こえてくるように感じる。

後悔しているのはあの夜のこと。

口付けになど縛られるのではなかった。

もう自分でも気づいていたはずだ。

彼が好きだ。

尻軽な女だと罵られてもいいから、自分にだけは嘘をつかなければ良かった。

青い瞳に捕らわれて、花は散った。

虎花散華（後書き）

終

虎花乱舞

身も心も疲れているのだろう。

竜玄は一度眠ると朝まで目覚めない。

いっぽう日中寝てばかりの鈴花は、夜は起きていることが多かった。おそらく生活が夜型になってしまっているのだ。今日は骨州の民に食事を配るという役目を果たしたので、疲れて夜眠れるかと思っていたのだけれど、逆に頭が冴えて眠れないでいた。

皇帝と皇后の間には剣が置かれている。

巨大な金属の剣だ。

暗闇に座り、壁の細工から忍び込んだ月光に照らされた竜玄の寝顔を見つめる。

あどけない少年の顔。毎日大変なせいか、眉間に皺が刻まれている。

皇帝になる前は將軍の位にあったと聞いた。皇族のお飾り將軍ではなく、父とともに各地を回って争いを収めていた優秀な軍人だったという。

情報源が虎家から来た侍女たちだということを差し引いても信憑性は高い。

輿の外にいた兵士たちも、鈴花には複雑な視線を投げかけてきたが、竜玄に向けるそれは信頼と愛情に満ちていた。部下に慕われているのだ。

じつと竜玄の寝顔を見ていたら、竜蒼の顔が浮かんできた。

印象が違いすぎるので考えたことがなかったものの、ふたりとも口元がよく似ている。

唇が薄くて大きいのだ。父親似なのかもしれない。

……瞳は違う。

ぼんやりと鈴花は思った。

そう、瞳は違う。色だけでなく、なにかが違う。

竜玄の瞳に見つめられると鈴花は身動き出来なくなる。彼から目が離せなくなる。

「……竜玄様……」

言葉が勝手にこぼれ出た。

自分で自分が情けない。竜蒼と約束をしておきながら、なんて尻軽な女なのだろう。

それでも心に嘘はつかなかった。考えれば十二年前からそうだったのかもしれない。竜蒼を待たせていても、竜玄の泣き声に立ち止まらずにはいらなかった。

やすらかな寝息を漏らす顔を見つめる。

溜息をついてつぶやいた。

「今夜は掛け布を蹴飛ばさないのかしら？」

彼は寝相が悪い。

鈴花に危害を加えたことはないけれど、掛け布は蹴飛ばす枕は放り投げるわけで、起きると毎朝強盗に押し入られたような部屋になっている。

期待して待つてみたが、残念なことに今夜の彼はお行儀が良かった。

人形のように直立した格好で眠っている。

「まあ良いわ。明日もあるのですもの」

竜玄に想いを打ち明ける気はない。

青い瞳の熱を自分への好意だと感じているのは自惚れだろう。たぶん本当は逆。鈴花が彼に恋をしたから、そういう風に感じているのだ。

なんて情けない。けれどどうしようもない。

花は流れに逆らえない。風に吹かれ、水に流されて恋に落ちる。

出来るのはきつと、自分の想いを認めるか認めないか選ぶことだけだ。

自分の心を自由に出来ないのだから、相手の心だって自由に出来るはずがない。

心の中で囁く。

……竜玄様が好き、大好き。

彼が涙するときは濡れた頬を拭ってあげたい。彼が傷ついていたならば、自分の命と引き換えにしても癒したい。眠った彼が暴れていたら

「何度掛け布を蹴り飛ばしても、絶対にかけ直してあげますね」

寝顔が少し引きつったように見えたのは気のせいだろうか。

狸寝入りされていたとしても、聞かれて困ることは言っていない。

鈴花は横臥して、剣の向こうの横顔を見つめた。

もしも眠りに就いたなら彼の夢を見られますように。

それが鈴花にとって、いま一番の願いだった。

州都の立に近づくと、飢えた村は少なくなっていた。

獅家の援助が行き届いているのだ。民想いで知られる獅公にしても、自分に近いところからしか守れないのだろう。自体は間違ったことではない。

獅家の分家にあたる男が統治している街の門を開いたのも、生きていくためには当然のことだったのだろう。少なくともこれで、民が命を失うことはなくなった。

「獅黄です。字は美牙。皇后陛下のお噂はよく聞いておりますよ」
歓迎の宴席で、街の太守は言った。

鈴花は扇を口元に当てて首を傾げた。

隣に座った竜玄が低い声で囁く。

「鈴花殿、美牙殿は兄上……」

彼は口籠り、辺りを見回した。

酒色に溺れているようでいて、同行している虎家の人間は皇帝と太守から目を離してはいない。街の受け渡しのおかげから、彼らは美牙を疑っていた。恭順など嘘に決まっているのだから、開いた門から攻撃しろと言いつけていたのだ。

当然宴席に出席するのも嫌がっていた。竜玄の気持ちを变えられ

ないことに気づいて、鎧だけは脱がないと彼に誓わせることで渋々譲歩した。

と、聞いている。竜玄が笑いながら教えてくれたのだ。

鈴花は複雑な気分だった。

虎家の心配はわかる。しかし彼らの言動は皇帝に対するものとは思えない。

……どこか竜玄様をないがしろにしている気がする。

竜姓がいつわりだからか。どれくらいの人間がそれを知っているのだろう。竜玄に尊敬の視線を向けている兵士たちも、真実を知ったら態度が変わってしまうのだろうか。

虎家の視線を無視し、竜玄は言葉が続けた。

「蒼の幼なじみでいらっしやるのです。彼から、あなたのことを聞いていたということでしょう」

鈴花は胸が痛んだ。

自分の気持ちに嘘はつかないでいようと決意したが、もちろん竜玄に伝える気はない。

鈴花と竜蒼が結ばれることを望む彼が、異母兄の話をするのは当然だ。

わかつているのに切なかった。

……情けない。間違っているのは自分なのに、竜蒼様のことを忘れたと思うなんて。

「んん？ 蒼のことを話していますか？」

猫のように口元を綻ばせた美牙に、虎家が緊張を走らせる。

竜玄は顔色を曇らせた。

「いえ、その……申し訳ありません。あなたの前で内緒話などして美牙はくすくすと笑みをこぼした。

「とんでもない。殺されなかっただけで充分です。こんなところで反逆者の名前を出した私が問題ですね。虎家の方々にも失礼いたしました」

いまずぐ首を切り落とされても、その顔は笑みを浮かべたままで

はないだろうか。

そんな不思議な雰囲気の男だ。

親戚だと聞いたせい、か、目元の辺りがどことなく竜蒼と似ているような気もした。

「ただ、もし私が皇后陛下のことを彼から聞いたのだと思っておられるのなら、それは違いますと申し上げたかったです。私は骨州の民に聞いたのです。飢えたひとびとに食べものをお与えになられたという、天女の化身のような皇后陛下のことを」

鈴花はうな垂れ、首を横に振った。

「あれは皇帝陛下のお考えです。わたしはただ、ご命令に従っただけ……」

言ってから後悔する。これでは嫌々行なったようではないか。

竜玄の気分を害してしまったかもしれない。

嫌われたくないと望むのも図々しい身の上だが、それと彼を傷つけることは別問題だ。

「もちろん偉大なる皇帝陛下のお考えでしょう。でもだからといって皇后陛下の行いが幻というわけではないでしょう？ もちろん皇帝陛下は色男です。それでも民としては、筋骨隆々とした男性よりも天女のような女性に給仕されたいものですよ」

言いながら、美牙は竜玄の杯に酒を注ぎ始めた。

竜玄は微笑んで、彼の言葉に首肯する。

「その通りです、美牙殿。俺が民でもそう思います。飢え死に寸前なら尚のこと、最後に見るのは鈴花殿がいい」

すっと、青い瞳が鈴花を見つめる。

熱い視線に射られて、時間が止まる。

鈴花は扇を握り締めて自分に言い聞かせた。

たぶんこれは演技。虎家の人間に皇帝と皇后の仲が良いことを見せ付けるためのもの。

勘違いしてはいけない。

竜玄に気持ちを知られているからではないし、彼に愛されている

からでもない。

それでも。いつわりでも。見つめ合っているだけで息が止まりそうなほど幸せだった。

永遠のような一瞬が終わる。

竜玄は美牙に酒を注がれた杯の香りを確かめた。

「……良い酒ですね」

虎家の咎めるような視線を鋭い眼光で打ち消し、杯に唇を当てる。見惚れていた鈴花は、ハツとして彼の手を取った。

「鈴花殿？」

「竜玄様、お酒だなんて……」

精悍な顔で、竜玄は子どもみたいに唇を尖らせた。

「確かに俺は鈴花様より年下ですが子どもではありません。大人です、皇帝なのです」

「それはそうかもしれませんが。でも……」

どうしても心配なのだ。体は大きいが、彼はまだ成長期だ。

黒髪の男が竜玄から杯を奪った。

「申しわけございません、美牙殿。玄皇帝陛下は、まだ十七歳であらせられますので」

そう言って飲み干す。

いつも影のように竜玄に付き従っている男だ。虎家の人間ではない。

落ち着いた雰囲気的美丈夫で、年ごろは先帝と同じくらいか。体格こそ劣るものの、年若い皇帝を嗜める姿は、家臣というより父親のように見えた。

……狼黒殿。字は鋭爪殿とおっしゃったかしら？

一番信頼出来る部下なのだと、竜玄に紹介してもらっていた。

「鋭爪、美牙殿に失礼だろう！」

「構いませんよ。忠義の武将、狼氏のことは知っています。私をお疑いならば、酒杯を奪う前に殺されていたでしょう。これは私の失態でした。お若い皇帝陛下と皇后陛下にはお茶をご用意させていた

だきましよう」

美牙はほほ笑み、召使いに茶の用意を命じた。宴席には太守以外にも、この街で重要な地位にある人間が出席している。

虎家はもちろん、ほかの兵士たちも彼らから目を逸らしてはいないが、鋭爪が美牙の杯を口にしても異常がなかったことで、少しは辺りの雰囲気安らいだようだ。

若い皇帝の飲酒を嗜める振りをして毒見をしたのかもしれない。

鋭爪が竜玄から離れないということも、虎家に出された宴席出席の条件のひとつだったと聞いている。

拗ねた顔をしながらも、竜玄は酒杯を諦め、用意された茶を飲み始めた。

「皇后陛下」

「あ、はい。なんででしょう？」

美牙に声を掛けられ、鈴花はあわてて竜玄から視線を外した。ずっと見つめ続けているのも失礼になるだろう。

本当はずっと、瞼を閉じてても浮かび上がるくらいずっと、視界に刻まれて消えなくなるくらいずっと、見つめていたかった。

「皇后陛下のお噂は骨州の民に聞いたのですけど、皇帝陛下のお噂は蒼に聞いたのです」

虎家の人間に緊張が走る。美牙の部下たちも蒼白になる。宴席の空気が一気に冷えた。

……ああ。

なんとなく、鈴花は納得した。

美牙は竜蒼に似ている。見かけだけではない。

わざと毒のある言葉を口にして、相手の反応を見ようとするとこるが似ているのだ。いや竜蒼よりひどい。きっと目の前に虎の尾があつたら、踏まずにいられない性格なのだ。

「美牙殿！」

竜玄の制止にも笑うばかり。

「失礼いたしました。ですが悪い話ではないのですよ。彼は皇帝陛下の即位前から言っていました。竜玄陛下には求心力がある。自分よりもはるかに皇帝陛下に相応しい、と」

ただのおべんちゃらだろうか。美牙の場合それだけではない気がした。

竜蒼を思い出させることで、竜玄を傷つけたりしないと良いのだが。

鈴花は竜玄の様子を窺った。

「ほら、そのように」

「はい？」

「皇后陛下の視線を常に独占なさっている皇帝陛下には、本当に求心力がありだと思ったただけなのでございますよ」

ふっと場の雰囲気が和らいだ。

虎家の人間の表情は複雑そうだけれど、兵士たちはにこやかな笑みを浮かべている。

鈴花はうつむいた。うつむきながらも竜玄に視線を送る。

彼は子どものように無邪気な顔で笑っていた。

「なんだかフラフラします」

美牙に用意された部屋で、竜玄はふたり分の寝具の真ん中に大の字に寝転がった。

「酒気に当たってしまったのですよ」

鈴花は彼の服を脱がそうと悪戦苦闘していた。

鎧の脱がし方がわからない。それに竜玄は大き過ぎる。

手も足も筋肉が盛り上がっていて重くてたまらない。普段よりも体温が高く、硬い体が妙にくにくにやと動いている。

酒席にいただけでこうなのだから、本当に飲ませなくて良かった。

「……ひとりでは無理ですね。だれかひとを……」

部屋の外には護衛の兵士たちがいる。

「嫌です」

竜玄はむくりと起き上がった。

「ほかのだれかを呼ぶくらいなら、自分で脱ぎます」

ドラドラしていたのは演技だったのかと思うくらい、てきぱきと脱衣する。

……あ！

彼は腕に巻いていた布までほどいてしまった。

気になっていた場所には痛々しい刀傷があった。

状態からして十二年前の傷ではない。自分の治療が間違っていたとしても、ここまで新しい傷のまま残っているはずがなかった。同じ場所なのは偶然だったのか。

「鈴花殿」

「は、はい？」

ふたたび横たわり、竜玄は満面の笑みで言う。

「むかし、兄上と約束したのです。ふたりで、ずっと鈴花殿をお守りすると。でも兄上はこうもおっしゃっていました。だれを夫にするのかは、俺たちではなく鈴花殿ご本人がお決めになることだと」
胸がざわめいた。彼はなにを言おうとしているのだろう。

もしかして。いや。そんな都合の良いことがあるわけがない。

低い声が吐息になって、甘く耳朵を打つ。

「……優しくしてください」

「え？」

「どなたの奥方におなりになっても、俺に優しくしてください」

「竜玄様……」

「この前、俺が寝た振りをしていたときに、おっしゃってくれたではないですか。何度掛け布を蹴飛ばしても絶対にかけ直してください」と

「は、はい。確かに言いました」

聞いていたのだ。聞かれても困らないだなんて嘘だった。顔から火が吹き出る。

「そんな風に、ずっとずっと優しくしてください。俺に優しくして

くださるのは、鈴花殿だけなのですから」

竜蒼はどうだったのかと聞きかけて、鈴花は言葉を飲み込んだ。自分でもズルいと思うけれど、彼のことを思い出させたくなかった。

「……優しくします」

鈴花は竜玄に掛け布をかけた。

「ずっとずっと優しくします。竜玄様はわたしの、わたしの……」

ごくりと唾を飲み込み、言葉を選ぶ。

「大切な方ですから」

にやけて力の抜けた竜玄の顔に手を伸ばす。

今夜ふたりの間に剣はない。

頬に触れた鈴花の指を竜玄がつかむ。

「俺以外の方の後宮に入られたとしても、俺は鈴花殿に優しくしてもらいに行きます」

「後宮は男子禁制ですよ？」

「宦官になります」

鈴花は微笑んだ。

竜玄の考え方は真っ直ぐだ。あまり損得を考えないのだろう。

周りの人間の顔を窺い、変に大人びて見えることもあるけれど、彼の心は子どものままなのかもしれない。

「ダメです、宦官なんて。施術が失敗したら死ぬこともあるのですよ？」

先帝の後宮にいたときに、宦官のこと少しは聞いていた。

「それでもいいです。鈴花殿のお側にいるためなら、死ぬのも怖くない。あるときだつてずっと竜宮にいたかった。どこも花だらけで、小さな天女が俺の……」

ふっと眠りに落ち、竜玄はいびきをかき始めた。

……真ん中で寝られてしまったのだから、仕方がないわ。

心の中でだれかに言い訳して、鈴花は彼に寄り添った。

その夜は普通に眠りにつくことが出来た。きっと竜玄の温もりの

おかげだろう。

虎花乱舞（後書き）

『狼の影』につづく

狼の影

骨州の都、立は近い。もういくつもの街と月日を過ぎてきた。

争いは起こらなかった。太守たちはみんな、門戸を開いて皇帝を迎え入れた。

不満そうだった虎家の人間も、獅家討伐後はそれぞれの都市を配分されるという約束をもらい、自分たちの私兵を見張りとして残すことで妥協していた。

皇帝軍とともに進む輿には窓がついている。

鈴花はそつと外を窺った。

前を進んでいた竜玄が気づき、こちらに蹄を向けようとする。べつに用事があったわけではなかったので、鈴花は焦った。

彼の隣にいた鋭爪がそれを止める。竜玄の周囲は虎家の人間で占められている。皇帝と同じ蒲公英色の髪をした人間の中、黒髪の男はひとりだけ浮いていた。

彼はいつも竜玄の横に影のように控えている。

子どものように頬を膨らませてなにやら反論した後、竜玄は鈴花に手を振った。

鈴花も彼に手を振り返す。それだけのことが、なんだか嬉しかった。

侍女たちが微笑んだ。

「皇后陛下と皇帝陛下は本当に仲がおよろしいですね」

鈴花も笑みを浮かべた。不自然な顔になってはいないだろうか。いつもの夫婦だと気づかれてないと良いのだけれど。

「仲が良いといえば、皇帝陛下と狼殿も仲良しでいらっしやいますのね」

「はい。皇帝陛下が將軍であらせられたところからの忠臣でいらっしやいますから」

「そうなの。天領にいたので詳しく知らないのですが、狼殿はお強

いのですか？」

本来なら皇帝の周辺は虎家で固めたいだろうに、それでも一緒にいることを許すほどのな。護衛として高い能力を持つに違いない。侍女のひとりが弾んだ声を上げた。

「ええ、それはもう！ 今上帝のことを何度もお救いになられていますわ」

べつの侍女が相槌を打つ。鋭爪はなかなか人気があるらしい。

……雰囲気があつて素敵ですものね。

竜玄が太陽だとしたら、鋭爪は月だろうか。いつもはひっそりと皇帝の影に隠れているけれど、ときおりふつとその存在を明らかにする。

多少陰気な風ではあるが、大人の男の渋さに惹かれる娘もいるだろう。

鈴花はどちらかといえば同年代が好みなのだと思う。

「鋭爪様はお強い上に面倒見もよろしくてらっしゃるので、兵士たちに大層人気があります。その鋭爪様に支持されているからこそ、今上帝も兵士たちに慕われていらっしゃるのですわ」

周囲の侍女たちに咎めるような視線を向けられて、浮かれていた侍女が青くなつた。

「あ、いえ……も、もちろん皇帝陛下は、鋭爪様なしでも慕われていらしたと思います」

鈴花は苦笑した。

いくら国の最高権力者であろうとも、竜玄はまだ若い。他者の力が必要なときもある。

「大丈夫、不敬だとは思いませんわ。そんな方を従えている皇帝陛下の素晴らしさがよくわかりますもの」

侍女は安堵の息を吐き、満面の笑みを浮かべた。

「そうなのです。そもそも鋭爪様は先帝陛下の即位直後に、政変による混乱に乗じて攻め込もうとした西方の蛮族から先帝陛下をお庇いになられて大怪我をなさったばかりか、美貌で知られた……あ」

夢中になって話していた侍女を、べつの侍女が肘でつついた。

「とても忠義の深い方でらっしゃるのね」

鈴花の言葉に、侍女は齒切れ悪く答えた。

「え、ええ……」

不審に思つて見回しても、みんな鈴花から視線を逸らす。

鋭爪には護衛として優れている以上のなにかがありそうだ。

それも気になるが、鈴花は竜玄が何度も彼に救われたという話が気になっていた。

平和な天領でのん気に暮らしていた鈴花は、竜天国の内外がそんなに乱れていたとは知らなかった。先帝が芳土宮に寄りつかなかったのは、政治が苦手だったからだけではなかったのかもしれない。獅家との戦いはどうなるのだろうか。

竜玄は危険に陥らないだろうか。鋭爪が救うといつても絶対ではなからう。

考えただけで心臓が潰れそうだった。

竜玄の腕の傷、あれは將軍として働いているときに出来たものだったに違いない。

のん気に十二年前のものかもしれないなどと考えていた、浅薄な自分が嫌になる。

ほかに傷があるのだろうか。

戦場では満足な手当てを受けられないこともある。いまならともかく、以前の竜玄はただの皇子に過ぎなかった。なにかあつても皇帝が優先されるのは当然だ。

考えているうちに心臓が早鐘を打ち出した。

後遺症が残っていたりはしないだろうか。

もしかして、寝相が悪いのは戦場で負った心の傷のせい？

そんなことまで考えてしまう。

動悸が激しい。なんだか耳まで痛くなる。

「……皇后陛下？」

「え、あ、はい！」

侍女に声をかけられて飛び上がる。ひとりで百面相をしていたようだ。

悩んでいても仕方がない。

とりあえず鈴花は、今夜竜玄に薬湯を淹れてあげることにした。

…… 武術でも学んでいれば良かった。うつん、ちゃんと天領の姫としての力があれば。

戦場でも彼の隣に立ち、守ることが出来ただろうに。

ふっと気づく。竜玄に信頼出来る相手がいたことを喜びながら、

鈴花はそれが自分でないことに、どうやら嫉妬しているらしい。

「はい、鈴花殿。お土産です」

その夜、輿の寝室に戻ってきた竜玄はそう言っ、小さな野の花を渡してくれた。

侍女たちは下がらせている。部屋の中にはふたりきりだ。

「可愛い。ありがとうございます、竜玄様」

彼は照れくさそうに微笑む。

「竜宮は花がいっぱいだったでしょう？ 花のない暮らしに退屈されているのではないかと思います」

鈴花はうなずいた。

「とても嬉しいです」

水を入れた茶碗に花を飾ろうとすると、青い瞳が丸くなった。

「違いますよ」

花を奪い、竜玄は簪のように鈴花の髪に飾る。

「こちらです。このほうが花だって喜びます。……俺も」

「竜玄様も？」

「はい。お美しい鈴花殿が見られて嬉しいです。あ、でも！」

少年は褐色の肌を赤く染め、鈴花から視線を逸らした。

「鈴花殿は普段からお美しいです」

「……ありがとうございます」

鈴花は顔を伏せた。

嬉しいけれど、心のどこかが冷めている。

優しい言葉をかけてはくれるものの、彼の頭には鈴花と結ばれる未来はない。竜蒼以外との選択肢は与えてくれたが、竜玄という選択肢は与えられていなかった。

こちらの気持ちを察したのだろう。竜玄の顔色が曇る。

鈴花はあわてて笑みを浮かべた。

「ま、毎日お疲れでしょう？ わたし、薬湯を淹れましたの。お飲みになりませんか？」

竜玄の表情が歪んだ。

「薬湯って……苦いのでしょうか？」

「それは、まあ、お薬ですから」

大きな体を丸める。

「俺、苦いものは嫌いです」

鈴花は吹き出した。

「この前の宴で、止めるわたしに偉そうなことを言って、お酒を飲もうとしていらしたのはどなたでしたか？ 子どもではないのでしよう、皇帝陛下？」

「でも……鈴花殿はあの夜、優しくしてくださいださると言ってくださったではないですか」

唇を尖らせる皇帝に笑いを堪え、鈴花は薬湯に砂糖とヤギの乳を混ぜた。

「甘くしましたよ。これなら飲めますか？」

不審そうに茶碗の湯気を嗅いだ後、竜玄は目を閉じ薬湯を飲み干した。

太い首。ごくりと喉が動く。青い瞳が見開かれた。

「本当に甘い。美味しいです、鈴花殿」

「目の前でお砂糖を入れたじゃありませんか」

薬湯の甘さに浮かれていた少年の顔が、戦場を潜り抜けてきた男の顔に変わる。

澄んだ青い瞳に影が差す。

「油断は出来ません。入れる振りをして入れなかったり、入れてない振りで入れたりするかもしれないじゃないですか」

鈴花の胸が、ちくんと痛んだ。

「……あ！……つと、えつと、その、鈴花殿にそういう真似をされるとは思っていないよ。ただ、あの、習慣で……」

額に脂汗をかき、瞳を潤ませる皇帝を睨みつける。

「ええ。わたしのことなど信用してはいけません。優しいというのは甘やかすということではありませんからね。どんなに竜玄様に嫌がられても、必要とあれば苦いお薬を無理矢理飲ませて差し上げますわ」

「それは、あの……鈴花様」

「なんででしょう？」

べそをかいた子どもの顔で竜玄が言う。

「優しいだけじゃなくて甘やかしてください」

「ダメです」

「そこをなんとか」

「ダメなものはダメです」

彼は唇を尖らせた。

「そんな意地悪ばかり言う鈴花殿にはこうです！」

大きな体がのしかかってくる。押し倒され、服の上から体をくすぐられた。

「えい、えい！」

「きやあ、もう、竜玄様ったら！ うふふ、くすぐりたいですわ」

優しくすると約束してから、彼は少し子どもに戻ったようだった。

邪気のない笑顔で鈴花を責め立てる。

「わたしも仕返しします！ えい」

竜玄に触れて、服の上からでもわかる逞しい体に気づき、鈴花は手を止めた。

ふたりは子どもではない。

十二年前、七歳と五歳の子どもだったときだって、こんな遊びは

しなかった。

「どうしたのです、鈴花殿。俺の勝ちですか？」

見下ろしてくる彼に触れられている場所が熱い。鈴花は視線を逸らした。

「え、ええ。竜玄様の勝ちです。だから甘やかして差し上げます」

震える声に気づかなかったのか、竜玄はわぁいと叫んで鈴花の胸に顔を落としてきた。

「竜玄様？」

「……頭、撫でてください……」

言われた通りに頭を撫でる。蒲公英色の黄色い髪は、想像していたよりも硬い。

「嬉しいなあ。俺、こうやって甘やかされたことないんです」

「そうなんですか？」

「はい。俺の母上は……俺のこと嫌いだったから。本当はべつに好きな男がいたのに、虎家の犠牲にされたんです」

「そう……」

「結婚してすぐに相手の男が蛮族との戦いに駆り出されて、半年後に戻ってきたと思ったら大怪我してて、その夫が大怪我してまで守った相手に伽を要求されて……」

鈴花は竜玄の頭を撫でていた手を止めた。

極最近どこかで聞いた話と重なる気がしたのだ。

大きな手が鈴花の手をつかむ。

「止めちゃ嫌です。もつと撫でてください。……前、俺に優しくしてくださるのは鈴花殿だけだと言ったとき、不思議そうな顔をなさいましたよね？」

「え、ええ……」

「蒼兄上はどうかかとお思いになられたのでしょうか？ はい、確かに蒼兄上はお優しくかったです。でもそれは親切という形の優しさで、こんな風に甘やかしてはくさいませんでした。まあ当然ですよ。想像するだけで気持ち悪いじゃないですか。俺が蒼兄上に抱

きついで、頭を撫でてもらっている姿など」

それはそうかもしれない。

「でも秘密にしましょうね、鈴花殿。蒼兄上は嫉妬深い。俺がこうして鈴花殿に甘えていたなんて知ったら、きっと殺されてしまいます」

鈴花は答えなかった。なんと答えればいいのかわからなかったのだ。

竜蒼と過ごした時間よりも竜玄と過ごした時間のほうが、もう長い。

気持ちは決まっている。

伝えられなくても変えることは出来ない。

竜玄が顔を上げた。褐色の肌、黄色い髪、真っ青な瞳。以前薄い唇が似ていると思ったけれど、いまは竜蒼の顔自体が思い出せない。「だけでもし、鈴花殿が蒼兄上以外の方をお選びになるのだとしたら、俺が兄上を殺してあげます。だから安心してくださいね」

彼は子どものように誇らしげな口調で、狂気を含んだ言葉を紡ぐ。蒲公英頭に腕を伸ばす。

「そんなことする必要ありませんよ」

硬い髪に指を絡める。

「……蒼兄上をお選びになるから大丈夫ということですか？」

竜玄は、どうしてこんなに泣きそうな顔をするのだろうか。しばらく無言で彼を見つめ、鈴花は口を開いた。

心は変わる。自分自身でも思いもしない変化を遂げる。だけど。

「なにがあらうと、心だけは自由ですもの」

花は流れ落ちる先を選べない。

ひとは恋する相手を選べない。

出来るのはただ、自分の気持ちを認めるか認めないかだけ。両想いになるもならないも思い通りにはならないものだ。

「そうですね」

竜玄の頭が鈴花の胸に落ちる。

「……なにがあるうとも心だけは自由です……」

鈴花は彼の頭を撫でながら、尋ねてみた。

「ところで、獅家との戦いは避けられないのでしょうか？」

「突然ですね」

竜玄は体を起こし、いつもの密談の姿勢になる。

鈴花を膝の上に抱き、耳元に口を寄せたのだ。吐息が熱い。

「……大丈夫です。獅家とは和睦の密約を結んでいます。もちろん虎家には内緒ですが」

信頼出来る間者が、彼と獅公をつないでくれているのだという。

安堵の息を吐き、鈴花は竜玄の広い胸に顔を埋めた。

彼が笑う。

「今度は鈴花殿が甘える番ですか？」

「いいえ。そうではありません。ただ……竜玄様が戦いで傷つくようなことがなくて、良かったと思っただけです」

「俺が傷ついたら嫌なんですか？」

「当たり前でしょう！ 大切な方が傷ついたら、嫌です」

「……ごめんなさい」

「竜玄様？」

「俺はたぶん、蒼兄上よりも父上に似てる。戦うことが好きなんです。だから獅家との和睦が成っても傷つくことはあるでしょう。先に謝っておきます」

「ダメです。そんなことなさないでください。先に謝られたって許しません」

くすくすと楽しそうな笑い声が耳朶を打った。

「そう言わないで俺が怪我したら薬をつけてください、むかしみたいに。薬湯を淹れてくださったのでもいいですよ？」

「……うんと苦いのにします」

「甘やかしてくださるとおっしゃったのに！」

「戦って傷つくのを許した時点で、甘やかしは終了です」

ちえつと舌打ちを漏らし、竜玄は鈴花の髪に手をやった。
ふざけている間にズレてしまったお土産の花を手に取り、飾り直
してくれる。

……この時間が、いつまでも続くといいのに。
鈴花は瞼を降ろした。

竜玄が言った通り、獅家との和睦は成った。

骨州の都、立は大きく門戸を開いて皇帝軍を迎え入れたため、小
競り合いすら発生しなかったのだ。

竜玄皇帝は軍を掌握していた。武将も一般の兵士も彼を慕ってい
た。

自由になる私兵たちをこれまでの街に置いてきたこともあり、虎
家には逆らうすべがなかった。竜姓の秘密は諸刃の剣だ。脅しのう
ちは力を持つが、明かしてしまえば自分たちにも被害が及ぶ。なに
せ知りながら竜玄を即位させたのだ。

虎家の人間はバカではなかった。

そして、皇帝軍が帰路を辿り出して半月が過ぎた。

翔の都に着いたときなにが待っているのか、鈴花は知らない。
いまはただ、竜玄と過ごせる時間を堪能していた。

ふたりは日々おしゃべりに興じ、子どものように遊んでいた。竜
玄がどこからか拾ってきた草の種を転がしてぶついたり、木の葉や
枝を組み合わせて動物を作ってみたり、そんな児戯にすぎないこと
しかしていなかったけれど、鈴花は楽しかった。

くすぐり合いは、あれ以来していない。

「鈴花殿」

「竜玄様！」

突然部屋に入ってきた竜玄を、鈴花は睨みつけた。

日は高い。本当なら皇帝は軍を率いて馬上にあるべきだ。
「なにをされているのです。まだお仕事の時間でしょう？」

氣を利かせた侍女たちが部屋を出て行く。

彼は笑った。

最近は昼間から鈴花と遊んでいることが多い。鈴花も最初は嬉しかったのだが

「もつと甘やかしてくださいよ。俺は獅家との和睦という大仕事をやり遂げたのです。しばらく遊んでいてもいいじゃないですか。：

…はい」

大きな握り拳の下に手を伸ばす。

褐色の太い指が開いて落ちてきた今日のお土産に、鈴花は叫んだ。

「きゃあ」

鈴花が取り落とした黒い虫を、竜玄は困惑した顔で捕まえる。

「虫はお嫌いでしたか」

「ふ、普通、女の子はそうでしょう？」

「コオロギですよ？ 確かにまだ季節ではありませんが、もう少ししたら綺麗な声で鳴いてくれるのに」

大きな体でしょぼんとうな垂れられると、罪悪感が湧いてくる。

悪気があったわけではないことはわかっていた。

それでもあの細い足が自分の掌の上で蠢くことを考えると背筋が凍る。

鈴花は辺りを見回し、小さな壺を手にとった。侍女のだれかが花を生けようとしていたらしいが、これを使おう。

「こ、ここに……」

不満そうな顔をしたものの、竜玄はコオロギを壺に入れた。布をかぶせて蓋にする。

「鈴花殿、野菜とお水もいりますよ」

「そ、そうですね」

荒い息を漏らす鈴花に、竜玄は吹き出した。

「そんなにお嫌いなんですか。いや、嫌いというより怖い？」

「よ、良いではないですか、べつに」

「ええ、構いませんよ。はい」

……憎たらしい。

鈴花は唇を尖らせた。

竜玄にはひとをからかって楽しむところがある。

とはいえそれは性格の悪さというよりも、男の子らしさなのかもしれない。

悪ガキのようにイタズラな笑みを浮かべる彼は腹立たしいけれど、嫌いではなかった。

獅家との和睦が結ばれたことで、心にふざける余裕が来ているのなら良いのだが。

「……ありがとうございます。秋に歌ってくれるまで大切に育てますね」

「秋になったら捨てちゃうんですか？」

「捨てるのではなく逃がすのです。虫は恋人を呼ぶために歌うのですから」

ふつと、竜玄の顔に複雑そうな表情が浮かんだ。

「ああ、そうでしたね……」

「竜玄様？」

「いいえ、なんでもありません。それじゃあ今日はなにをしましょう？ ふたりで竜でも作りますか？」

「なにもしません。竜玄様はお外にお戻りください」

「ええっ！ それはないですよ、鈴花殿」

「……竜玄様……」

ふざけていた竜玄は、真面目な顔になって見つめてきた。

「もう噂をご存知なのですね。まったく女性は油断なりませんね」

皇帝軍が帰路を辿りだしてしばらくして、兵士たちの間に妙な噂が流れ始めた。

竜玄は先帝の子ではないというのだ。

彼の母親は人妻だった。人妻でありながら皇帝と通じたような女なのだから、後宮に上がった後も男出入りがあったとしてもおかしくない。先帝の後宮は乱れていた。

あるいは最初から、元の夫との子どもを皇帝の子だと偽ったのかもしれない。

そこには、なんの根拠もない。

流れ出したきっかけもわからない。

竜玄を慕う兵士たちが信じるはずなかったが、最近の彼は軍務を抜け出してばかりだ。

鈴花と遊んでいるのならまだ良いほうで、意味もなく暴れだすことも珍しくない。

罪のない兵士を怒鳴りつけることもあった。

竜玄の評判は徐々に落ち、同時に噂を語る声が大きくなっていく。

「……お願いです。皇帝としてのお役目を果たしてください」

彼は微笑む。青い瞳には感情が浮かんでいない。

糸の切れた操り人形のように見えた。

「俺の役目はもう終わりました」

最初から気持ちは変わっていないのだろう。

竜玄にとって皇帝となるべき人間は竜蒼だけなのだ。

自分は慕われてはいけないと思っているのかもしれない。しかし竜蒼の時代が来たとして、大將軍に選ばれる予定の竜玄にも人望は必要はずだ。

……なにを考えているの？

彼の気持ちを想像すると、嫌な発想ばかりが浮かんでくる。

鈴花は不安だった。

皇帝軍に流布した噂の源として、鋭爪が処刑されたのは数日後のことだ。

処刑は竜玄皇帝本人の手で行なわれた。

わけがわからない。

鈴花は戸惑っていた。

侍女たちの間にも動揺が走っている。兵士たちなら、さらにだる

う。

鋭爪の死によって噂が消えることはなかった。
むしろ前よりも強く語られるようになった。

虎家は隠しているけれど竜玄の母は鋭爪の妻だった。竜玄は
先帝の子どもではなく、鋭爪の胤。だから彼は父を殺したのだ、と。
鈴花にはわからない。

後宮にまで入っていたのに、先帝を見たことがなかった。
先帝と鋭爪、どちらが竜玄に似ているのかわからない。
ただ、記憶に残る竜玄と鋭爪の姿にはいつも暖かい雰囲気があっ
た。

こんな終幕を迎えるとはとても信じられない。
本当の親子だったとしたらなおのこと、鋭爪は竜玄のためにそれ
を隠し通しただろう。

……もしかしたら。
これはなにかの計画の一部なのかもしれない。
鋭爪の死後、竜玄は鈴花の前に顔を見せなくなった。

夜も輿ではなく、馬上か外に張った天幕の中で眠っている。
嫌な予感が胸をよぎる。

……もしかして竜玄様は、わたしが竜蒼様を選んだと確信して、
自分を消してしまうおつもりなのでは？

鈴花が異母兄以外の人間を選んだなら、竜玄はきっと、そのだれ
かを結ばせるために竜蒼を始末してくれただろう。もちろんそれは
鈴花の望むところではないが。

でも鈴花が竜蒼を選んだなら、彼にとっては自分の役目は終わり
ということなのかもしれない。
背筋が凍る。

鈴花は自分で自分を抱き締めた。
それなら。

それが事実だとしたら、どうしたら良いのだろう。
彼が好きだ。鈴花は竜玄が好きだった。

彼の手が血に汚れていても、瞳に狂気が浮かんでいても、大きな体で甘えん坊な年下の少年が好きだった。

たとえ気持ちを伝えることは出来ないとしても、受け入れてもらえないのだけれども、心でどう思うかは鈴花の自由だ。

…… 竜玄様に生きていて欲しい。

彼がなにを考えているのかはわからないけれど、それが忌まわしいことだと確信していた。そうでなければ鋭爪のような忠義の部下を殺すわけがない。

ずっと側についていたら、彼が愚かな行ないをするのを止めることが出来るだろうか。

あるいは天領の姫として薬を作り、なにが起こっても対処出来るようにしておくべきか。

どちらにしろ鈴花は、落ちて流されるだけだった花は、流れに逆らうことを選んだ。

狼の影（後書き）

ずっと側にいる
出来ることをする

『虎花落水』につづく
『竜花虎帝』につづく

虎花落水

「……鈴花殿……」

耳元で不機嫌そうな声が呼びかけてくる。

「なんですか？」

鈴花はあえてにこやかに答えた。

都はもう近い。

鈴花は馬上の竜玄の膝にいる。逞しい腕が体を支えてくれた。彼がなにを考えているのか知らないが、こうして側にいれば止めることが出来る。

「どうしたのですか？」

「竜玄様が輿に来てくだらないから、わたしのほうから参ったのです」

少年がうなじに溜息を落としてきた。

「……鈴花様。軍にいるのは男ばかりなのです。獅家との戦いで略奪をしたり欲望を満たしたり出来ると期待していたのが外れて、不満を持っている兵士ばかりです。そんな男たちの前にお姿をお見せになられるのは……」

「あら。以前わたしに骨州の民に食べものを配るようおっしゃったのは竜玄様ではございませんの。あのときもわたしは、兵士たちの視線に晒されておりましたよ」

「あのときとは事情が違います。いまは……」

そう、いまは、兵士たちの視線は冷たい。

皇帝と皇后の仲睦まじい姿に、竜天国の輝かしい未来を感じてはいないようだ。

本当に狼氏、鋭爪は心から慕われていたらしい。

兵士たちにとって竜玄は、もう信頼出来る皇帝ではなかった。

だれよりも忠実な部下でさえ、くだらない噂から身を守るために斬り捨てる、臆病な虎家の傀儡だった。その人形が天女の力を持った

ない形ばかりの皇后とじゃれていても、怒りの炎に油を注ぐだけだろう。

けれど兵士たちの嫌悪と憎しみを感じれば感じるほど、鈴花は竜玄から離れることが出来なくなっていくた。

胸によぎった嫌な予感はいくつふくらみ、皮膚はチリチリと騒いで危険を告げる。

……なにかが起きる。いつか、もうすぐ。

風が冷たい。西の空が夕暮れに染まり始めた。

竜玄が馬を止める。

「輿にお戻りください」

彼の言葉に唇を噛む。すべてが闇に包まれる夜こそ、側にいて守りたいのに。

竜玄は鈴花を抱いたまま、馬から降りた。

輿が止まり、迎えに来た侍女たちに引き渡される。

「お休みなさいませ」

挨拶をして輿に上がる瞬間、不意に鈴花は振り向いた。

軍が揺れている。いや、だれかが人込みをかき分けて走っているのだ。

「皇后陛下！」

侍女たちの制止を振りきり、竜玄へと走る。

馬から降りたままだった彼に向けて走ってきた兵士の前に転がり込む。

腹が熱い。

「鈴花殿っ！」

竜玄の叫び声。

鈴花はとっさに腹を押さえた自分の手を見た。

赤い。血の色に染まっていた。刺されたのだ。

すぐ側で空気の唸る音がした。

鈴花を刺した男の首が、竜玄の剣で刎ねられる。

ごろりと地面に転がった頭は、まるで作り物のように見えた。

……バカなことをしてしまっただわ。

鈴花が庇ったりしなくても、竜玄は自分の身は自分で守れたのかもしれない。

でも。

血に染まっていないほうの手を上げて、泣きそうな彼の頬に触れる。

でも仕方がない。わかっていてもきつと、鈴花は自分を止められなかった。

だって心配なのだ。心配で、大切に、愛しい

「ご無事で、ようございました……」

「なぜ！ 鈴花殿、なぜ！ 都から密偵が報告してきたのです。宦官たちが蒼兄上の解放に成功したと。あなたはただ、無事にお帰りになればよろしかっただけなのに。ここで死ぬのは俺だったのに！」

最後の力を振り絞って、鈴花は泣きながら覆いかぶさってくる竜玄に口付けた。

あの日、あのとき、竜蒼と口付けさえしなければ、竜玄に素直な気持ちを伝えられたのだろうか。それともこんなにも彼を恋するようになったのは、いけないことをしているとこの禁忌の想いに煽られたからだっただのだろうか。

……どちらでも、良いわ。

好きな相手に口付け出来た。

それだけが事実で、とても大切なこと。

「鈴花殿、まさか……まさか、俺を？」

自然に顔が微笑むのがわかった。

「そんな、だったら、だったら俺はこんな、こんなこと……」

強い力で引き寄せられた。

抱き締められて、抱き締め返したいのにもう、鈴花の腕には力が入らない。

広く硬い胸、腹からあふれる血よりも熱い涙が頬を焼く。

「……耐えられなかった。耐えられなかったんです、俺は。鈴花殿

が蒼兄上と睦まじくしておられる姿を見ることに。だから鋭爪に相談して、こんなくだらない計画を……」

……ああ、間違えてしまった。

竜玄の声を聞いていたら、さっきまでの幸福感が消えていった。ダメだ、これではダメだ。このままでは彼は自分の後を追ってくる。

ほら、剣を持って、刃を自分の首に当てている。

やめて、と口に出す力も残っていない。

鈴花の頬を伝わっていた竜玄の涙が、彼の血で覆われた。

虎花落水（後書き）

終

竜花虎帝

もう何日竜玄と会っていないのだろう。

鈴花は輿に閉じこもり、毎日薬を作っていた。

手に入る限りの材料を使い、天領で教わった薬を作り続けている。それに意味があるのかどうかはわからない。

けれどこれが、鈴花に出来る唯一のことだ。

竜玄は相変わらず輿には来ない。

翔の都が近い。皇帝と皇后が戻ったとき、そこにはなにが待っているのだろうか。

鈴花は顔を上げた。

「……だれか？」

輿の外が騒がしい。なにか起こったのだろうか。

薬の調合中は距離を置かせている侍女たちを呼ぶ。

「皇后陛下！」

「なにがあったのですか？」

ざわめきが近づいてくる。

輿が止まり、揺れる。部屋の扉が押し開けられた。

竜玄だった。腹から血を流しながら微笑んでいる。

彼はよろよろと鈴花に歩み寄り、その場に倒れこんだ。

「竜玄様！」

皇帝を追ってきた側近が、彼が兵士に刺されたことを教えてくれた。

鋭爪に恩を持つ男で、竜玄の行ないが許せなかったらしい。

竜玄を刺した後、男はすでに捕らえられていた。

鈴花は辺りを見回した。

なにが起こっても良いように、薬をたくさん作ってきた。

特別な力を持たない鈴花が出来ることはそれだけだった。

血止めの薬、痛み止めの薬、滋養強壯の薬　でも。

鈴花は悟っていた。どんな薬もう効きはしない。竜玄は急所を刺されている。

おまけに支えもなしに輿に上がり、血を垂らしながら歩いてきたのだ。

出血多量で意識を失っていないのが不思議なくらいだ。

「ごめんなさい、鈴花殿。服を汚してしまいました」

「……かまいません」

「後……後少しだから、俺、俺のこと甘やかしてください。あ、でも安心してください。鈴花殿は大丈夫です。密偵から連絡があったんです。宦官たちが蒼兄上を解放したと……だから、都に帰れば、ちゃんと……」

鈴花は彼の唇を塞いだ。

青い瞳が丸くなる。

もつと早くこうしておけば良かった。

夫を失って再婚する女だっている。初恋が実るとも限らない。

誓いを立てた相手以外に心が移ったってかまわないではないか。

竜蒼に責められることは覚悟しよう。竜玄に軽蔑されたってかまわない。

もう心だけでは収まりきらなかった。気持ちの外にあふれ出る。

「竜玄様はバ力です」

鈴花は竜玄の大きな手をつかんだ。

「……鈴花殿……」

掠れた声が胸を締め付ける。

「わたしは、わたしはあなたが好きです。だから許しません。死んではいけません」

もし本当に自分に天女の血が受け継がれているというのなら。

鈴花は心から願った。

……わたしの命を竜玄様に！

自分がうつすらと光を放っていることに、鈴花はまだ気づいていなかった。

天女を妻としたものが真の竜。

天女の力に目覚めた鈴花に命を救われたことで、竜玄は本当の皇帝となった。

都に戻ったふたたりを前に竜蒼は臣下の礼をとった。

もうだれも、本人でさえ、竜玄がいつわりの皇帝だとは思っていない。

鈴花は手を握り、開いた。

あのときどうやって天女の力を呼び起こしたのか、いまは思い出すことも出来ない。

「鈴花」

竜玄の声に顔を上げる。

嫌なわけではないのだけれど、呼び捨てにされるのはまだ慣れない。彼自身も同じようで、褐色の頬がほのかに赤く染まっていた。

ここは後宮。天皇后に与えられた館の一室だ。

新しい後宮には、まだ鈴花以外の妃はいない。

鈴花が天女の力を示した以上、ほかの妃はもう入らないかもしれない。

「竜玄様……」

「沈んだ顔ですね。どうしました？」

「……わたしがちゃんと、もっと早く竜玄様に気持ちを伝えしていたら、狼氏が亡くなられることはなかったのかと思って……」

鋭爪の処刑も、噂が流れたことも、竜蒼の治世を望む竜玄の計画の一部だった。

ただ竜玄を刺した男は天女の力による皇帝の回復を祝う恩赦として、罪を免れていた。

彼は悲しげにうな垂れる。

「俺も後悔しています。でも……鋭爪はどちらにしろ、近いうちに死ぬつもりだったのだと思う。亡くなった奥方……母が、俺が成人

するまで見守ってくれと頼んだから、これまで生きてきたのだと言っていたから」

悲しい話だ。

身分や立場、どうしようもない運命が思いのままに生きることを阻む。

ひとはだれも水に落ち、流れる花に過ぎないのかもしれない。

それでも。

鈴花は、座った竜玄に寄り添った。

心を偽ることは出来ないのだろう。

間違っている、愚かでも、だれかを想い愛する気持ちだけは変えようがない。

鈴花が竜玄を救った力は天女のものではなく、流れを溯り天へと昇る竜のものであったのかもしれない。

太い腕に添えた手を、大きな手が包んでくれた。

温かい。

「鈴花」

「はい？」

「明日の朝議で、蒼兄上のことぶん殴ってもいいですか？」

竜蒼は太師として竜玄を補佐してくれている。

太師は本来幼帝のときに立つ役職だが、三男で跡取りとしての教育を満足に受けていない竜玄には必要な存在だった。太師は補佐であるとともに教育係でもある。

「ど、どうしてです、いきなり」

「だって、蒼兄上が鈴花に口付けをしたから、事がややこしくなっただんじやないですか。大体女装して後宮に忍び込んだこと自体大罪です！」

鈴花はうつろえた。

「そ、それは……で、でもそんな、竜玄様に殴られたら、竜蒼様は……」

弟のほうが体の大きな兄弟なのだ。

「皇后ともあるうものが臣下に尊称をつけるのはおかしいです。と
いうか、俺の気持ちよりも蒼兄上のほうが大切なんですか？」

「そういうわけでは……」

竜玄の顔色を窺って、鈴花は頬をふくらませた。

青い瞳の奥にイタズラな光が煌いている。

冗談だ。鈴花をからかっているのだ。それはもちろん、多少は嫉妬もあるだろう。

「お好きになさいませ」

竜玄が目を剥いた。

「え？ い、いいんですか？ 蒼兄上はあれで性格が悪いんですよ？
怒って反乱を起こされたらどうします？ もしかして、本当は
やっぱり兄上の皇后になりたいんですか？」

鈴花は彼に口付けた。

自分も竜玄も過ちを繰り返してきた。取り戻せないこともあるけれど、
それでも精いっぱい生きていくしかない。

「……鈴花……」

「約束したでしょう？ わたしは竜玄様を甘やかします。だからお
好きになさいませ」

「う、うん。じゃあ蒼兄上を殴るのはやめておきます」

「そうですか。ええ、それがよろしいでしょう」

「あの……たまには俺から口付けしてもいいですか？」

鈴花は黙って瞼を閉じた。

甘えん坊な皇帝の熱い唇が落ちてくる。

皇后のために用意された煌びやかな部屋の隅に置かれた壺の中で、
コオロギが恋の調べを奏で出す。

花は竜となり、虎は皇帝となり、新しい物語が始まろうとしていた。

竜花虎帝（後書き）

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1573w/>

『竜皇帝の花嫁』

2011年10月7日01時09分発行